



岐阜大学留学生センター

設置15周年記念誌

記念事業実行委員会

目 次

巻頭言	留学生センター長 小林 浩二	1
-----	----------------	---

設置15周年記念に寄せて

岐阜大学留学生センター設置15周年にあたって	岐阜大学長 森 秀樹	2
15周年を機に	岐阜大学副学長（国際戦略担当） 廣田 則夫	3
Toward an internationally opened, globally visible university		
—岐阜大学留学生センター設立15周年を記念して—	前岐阜大学長 黒木登志夫	4
留学生センター設置15周年を祝しさらなる発展を願って	元岐阜大学長 金城 俊夫	5
留学生に良い印象を持ち帰って	国際交流の輪の黒野 会長 工藤 治示	7
留学センターとの絆（設立15周年に寄せて）	郡上八幡国際友好協会会長 鷺見 幸彦	8
多言語・多文化の架け橋としての留学生センターの発展を	初代留学生センター長 中須賀徳行	10
留学生交流が輝く大学へ	第2代留学生センター長 堀内 孝次	14
留学生センターの新たな挑戦にむけて	第3代留学生センター長 ジョン・G・ラッセル	17
ある記憶	第4代留学生センター長 武脇 義	19
岐阜大学留学生センター設立15周年記念に寄せて	ルンド大学 鈴木ルンドストロム和代	20
岐阜大学の留学生センター設置15周年記念に寄せて	ウエストバージニア大学 能 亜佐子	22
University of Technology, Sydney（シドニー工科大学）	シドニー工科大学 守田 佳子	23
留学生センター設立15周年、おめでとうございます	エアフルト大学 仁科 陽江	24
岐阜大学での一年間を回顧する	木浦大学校 朴 賛基	26
思い出すこと	留学生センター非常勤講師 加藤由紀子	27
岐阜大学留学生センター設立15周年おめでとう、そして、感謝		
……………愛知きわみ看護短期大学学長補佐（元岐阜大学学生部学生課国際交流事務室長）	森山 章	29
留学生センターの発展を願って	前岐阜大学学務部留学生課長 眞野 初	31

帰国留学生からのメッセージ

岐阜大学の思い出		
……………第5期日本語・日本文化研修留学生 バガダエワ・アネリ（カザフスタン、カザフ民族大学）		32
留学の思い出		
……………第6期日本語・日本文化研修留学生 ペーテル・ジョンソン（スウェーデン、ルンド大学）		33
岐阜大学での思い出	第7期日本語・日本文化研修留学生 宋 暁煜（中国、広西大学）	33
世界への一歩	第9期日本語・日本文化研修留学生 丁 允智（韓国、木浦大学）	34
一生ものの機会		
……………第7期日本社会文化プログラム留学生 ホリー・マッケナ（オーストラリア、シドニー工科大学）		34
岐阜大学の日本語と日本文化プログラム		
……………第8期日本社会文化プログラム留学生 バド・ルイス（アメリカ、ウエストバージニア大学）		35

留学経験者からのメッセージ

留学生センター設立15周年にあたって……………	奥村明日香（教育学部生涯教育課程2005年卒業）	37
岐阜から世界へ……………	杉山 真央（応用生物科学部2009年卒業）	38
留学生生活を振り返って……………	塩澤 直人（教育学部4年）	39

学術交流協定の経緯（留学生センターがリエゾンの協定校）

ルンド大学……………	留学生センター准教授 土谷 桃子	41
木浦大学……………	留学生センター教授 森田 晃一	43

留学生センターの事業紹介

日本語研修コース……………	留学生センター 橋本 慎吾	44
日本語・日本文化研修コース……………	留学生センター 森田 晃一	45
留学生指導・相談……………	留学生センター 太田 孝子	46
日韓理工系学部留学生事業……………	留学生センター 橋本 慎吾	47
日本社会文化プログラム……………	留学生センター 橋本 慎吾	48
全学共通教育……………	留学生センター 森田 晃一	50
サマースクール（受入）……………	留学生センター 土谷 桃子	50
サマースクール（派遣）……………	留学生センター 太田 孝子	52

資 料

留学生センター沿革……………		54
歴代センター長等……………		56
留学生センターの広報活動……………		57
1. 広報誌の発行……………		57
2. 特別講演会……………		58
3. フォーラム等……………		59
留学生数の推移……………		61
1. 岐阜大学外国人留学生受入れ状況……………		61
2. 短期交換留学生数（受入・派遣）……………		61
3. 留学生センター所属留学生数……………		64
4. サマースクール参加学生数（受入・派遣）……………		65
学術交流協定校一覧表……………		66
留学生センター憲章……………		68
留学生センタースタッフ一覧……………		69
15周年記念事業実行委員会委員……………		69



巻 頭 言

留学生センター長 小 林 浩 二

岐阜大学留学生センターは、1996年5月に設立され、今年で15周年を迎えました。留学生センターが15周年を迎え、そのための記念事業を開催でき、併せて『留学生センター設置15周年記念誌』を発行できたことは、私にとって大きな喜びです。

我が国は、すでに20年余りにわたって低迷期が続いています。こうした低飛行を脱却するためには、政治、経済、社会のあらゆる面にわたっての改革が必要なことはいうまでもありませんが、3月11日に起こった未曾有の東北大震災との関連で考えると、脱原発、緑化政策の積極的な推進、公共交通の推進・自転車道の整備等のいわゆる「新たな環境政策」とでもいうべき、大胆な施策が求められているといえましょう。エネルギー消費の増大＝生活の質の向上といったこれまでのスパイラルを転換させるための生活様式の見直しも不可欠です。

また、私は、我が国の産業政策の課題として、観光立国の推進をあげたいと思います。これからの観光政策に重要なのは、とりわけ外国人観光客の誘致です。そのためには、町並み・街路樹の整備といった景観形成、インフラ・宿泊施設の整備等のハード面の整備のほかに、外国人に対応できる人材の確保・育成、地域のホスピタリティの向上等のソフト面の充実が不可欠です。こうした政策を構築・実施

するための行政、民間、地域住民の積極的な活動、それらの連携のさらなる強化が必要になっているといえましょう。

しかし、基本的には、私たち国民一人ひとりの能力を高めることです。グローバルな視点でものごとを捉えることができ、多様な生活や文化を理解できる、そうした人材の育成です。何よりも、異文化社会の体験が重要になっているといえましょう。

岐阜大学留学生センターは、これまで、外国人留学生のための日本語教育や研究指導、日本人学生の留学のための相談・外国語研修、留学生と日本人学生を対象にした日本文化や歴史に関する講義を行ってきました。そして、これらの諸活動を通して地域との連携を積極的にはかってきました。これらの諸活動からして、岐阜大学留学生センターの役割はますます大きく、かつ重要になっているといえます。私たち留学生センターは、これまでの活動を振り返り、新たな時代の要請を踏まえつつ、岐阜大学のさらなる国際交流の発展に尽力したいと考えております。

最後に、これまで留学生センターを支援くださったすべての皆様に対して、心から感謝の意を表したいと思います。



岐阜大学留学生センター設置15周年にあたって

岐阜大学長 森 秀 樹

岐阜大学留学生センターが設置されたのは1996年のことである。しかし、留学生が岐阜大学へ来始めたのは、ずいぶん昔に遡るし、国際交流会館 A 棟が竣工したのは1987年（C 棟は2011年）、第1回岐阜大学サマースクールが開講したのは1988年である。因みに学生の留学の事柄を含む大学の国際交流を議論する岐阜大学国際交流委員会（現、国際戦略本部）が発足したのは1981年である。岐阜大学には常時400名弱の留学生が滞在しており、留学生センターの方々には長い間に亘って、日本語研修などを通して留学生をお世話してきた。このことに関して、深く御礼申し上げたい。岐阜大学は大学の方針の一つとして、国際化を挙げている。研究者の国際交流もさることながら、岐阜大生が多くの異文化を理解し、国際的な視野を有することが将来展望に繋がるものと理解している。日本人にはイスラム文化圏の人々の習慣に少々戸惑いを覚えることもあろうが、彼らとの接触によって学ぶことも多いと思う。私は若い時の米国留学中（ニューヨークのがん研究所）、インド人やニュージーランド人の研究者と机を並べていたし、夏にはユダヤ人の夏期学生に研究を手伝ってもらっていた。当時、意思の疎通を欠くこともしばしばであったが、異なった文化に関する会話が今でも楽しい思い出になっている。岐阜大学には41の海外協定大学がある。最近、協定校の一部である、ルンド大学とリトアニア工科大学を訪問する機会を得た。今回改めて、北欧諸国の歴史をにわか勉強した。フィンランドやバルト3国は長いつらい異民族に支配された時を有している。数百年の異民族支配の間、持ち続けた祖国発展の願いは強い。本学の学生に是非そうした国の人々とも接触させてやりたい。刺激になるだろうし、学ぶことも多いであろう。

本年3月11日に東日本大震災が発生した。福島原発の破壊を伴う未曾有の災害のため、日本における

多くの行事が中止となった。当然、岐阜大学の留学生の多くも一時帰国した。私共も夏の恒例となっているサマースクールへの海外からの参加は難しいものと推定していた。しかし、ルンド大学17名を含むサマースクール生は予定通りやって来た。聞くところによると、ルンド大学の学生は大学当局に対し、日本へ行くことを希望する嘆願書を提出したそうである。嬉しいことである。

近年、学生の就職活動の早期化、長期化が社会問題となっている。この問題の解決に産業界の協力が必要なのは言うまでもないが、職業継続のための人間力獲得強化やキャリア教育充実に大学がさらに努力することが要求されている。岐阜大学においても、本年からキャリアセンターを発足させた。学生に人間力を強化させる手段の一つは海外生活の経験であろう。しかしながら、日本の大学生の留学希望は以前に比較して著しく減少してきている。岐阜大学と同様である。最近、大学の秋入学の議論が起きている。このようなことが実現し、高卒から大学の秋入学までの半年間を海外留学に活用するのも良いかもしれない。

岐阜大学留学生センターは2007年から、独自の留学生受け入れのプログラムを有する様になった。日本社会文化プログラムがそれであり、同時に岐阜大学留学生センター教授会も発足した。このための議論は私が国際交流委員長（副学長）を努めていた時、同委員会で行っていた。留学生センターが独自のプログラムを有している大学はあまりないと思う。15周年を迎えるにあたり、留学生センターが留学生の受け皿として日本社会文化プログラムをさらに充実させることと同センターが全学の留学生のために更なる貢献をすることを切に願いたい。それが岐阜大学の国際化を通しての発展の道になると信じる。



15周年を機に

岐阜大学副学長（国際戦略担当） 廣田 則夫

岐阜大学留学生センター設立15周年、誠におめでとうございます。

本学の留学生受け入れは、1983年の中曽根内閣によるいわゆる「留学生10万人計画」の提言を機に活発に行われるようになった。というよりも日本中の大学が本格的に「国際交流」に向けて動き出したのもこの時期である。本学の留学生受け入れも、当初は日本政府の奨学生や外国政府による政府派遣留学生が主であった。が、「留学生10万人計画」により、私費による留学生の数も徐々に増えてきた（「計画」では、10万人達成時の私費留学生の占める割合を9割程度としていた）。また、それと軌を一にして、岐阜県、岐阜市等の自治体が海外諸都市との姉妹交流提携を活発に進める中で、本学の学术交流提携先の大学も徐々に増え続け、現在では、15ヶ国41大学との大学間学术交流提携、7ヶ国16大学の学部等との部局間協定を結ぶに至っている。昨年度、ブラジルのカンピーナス大学との学术交流提携締結25周年を記念した「ブラジル日本国際ワークショップ」を本学で開催したが、これも岐阜市とカンピーナス市との姉妹提携をきっかけとしたものである。

「留学生10万人計画」の達成のために、留学生の受け入れのための基盤が整備され、本学では、国際交流会館（現在のA棟）建設とともに、国際交流委員会の下に各学部から「馳せ参じた」教員と岐阜市を中心とする地域社会のボランティアによる「国際交流室」から実質的な国際交流がスタートとした。留学生に対する日本語補講、スウェーデンの Lund 大学の学生を対象にした「サマースクール」もこの頃から始まったものである。「国際交流室」当初は、100名にも満たなかった本学の留学生数が、年々増加し、「10万人計画」が達成された頃には、200名を優に超す留学生を受け入れるに至った。今から

15年前に、本学のさらなる国際化・留学生教育の充実を目指して「留学生センター」が発足し、従来の「国際交流室」の事業を引き継ぎ、さらに本格的な留学生の受け入れのための基盤が充実し、留学生教育、留学生と地域社会との接点としての役割を担い、一時は400名を越える留学生の生活支援、就学支援の「センター」として重要な役割を果たしてきたと言える。

政府は、「留学生10万人計画」達成を踏まえ、あらたに2008年、「留学生30万人計画」を発表した。これは、日本への留学生を、2020年までに、2008年当時の12万人から30万人に増やそうというものである。「10万人計画」においては、とすれば「数の達成」と「国際貢献」、つまり「できるだけ多くの留学生を日本で教育し、その成果を母国で活かしてもらう」ことを目標としていたが、「30万人計画」では、それと同時に「質的な充実」と「日本（地域）社会への定着」、つまり「優秀な海外からの留学生を日本で教育し、できれば、そのまま日本（地域）の企業などに就職する」ことも視野に入れた留学生の受け入れが求められている。つまり、大学の「留学生受け入れ戦略」の中に、「留学生の就職支援」というミッションがあらたにクローズアップされてきたと言える。留学生に対する日本語教育、就学支援、留学生と地域社会の協働活動の支援、就職支援など、「留学生」をキーワードにした要請は、我々を取り巻く社会・経済等の変化に応じて多種多様になり、それらの要請に対して迅速な対応が常に求められる。

設立15周年を迎えた「留学生センター」が、新たな社会環境、要請の中で15年の知見・経験を活かしながら、本学の国際化にさらに大きく寄与することを期待する。



Toward an internationally opened, globally visible university

—岐阜大学留学生センター設立15周年を記念して—

日本学術振興会 学術システム研究センター副所長 黒木 登志夫 (岐阜大学名誉教授 前岐阜大学学長)

特別に気にすることもなく使っている言葉であるが、留学生の語源を調べたことがある。Wikipediaによると、奈良時代、遣唐使、遣隋使などと共に、中国に渡った学生、僧などを意味した「留学生（るがくしょう）」という言葉に由来するらしい。わが国の歴史において、100年近く前までは、留学生は、外国に行き、その地に留まり学ぶ学生を指す言葉であった。それが、学問と社会経済の発展の結果、わが国は、留学生の受け入れ国となったのである。その意味で、留学生は、大学の国際化を示す一つの指標である。

これまで、日本の大学は、日本人による、日本人のための大学であった。しかし、国際的な競争に生き残るためには、大学自身も大きく変わり、国際的に開かれた、世界から見える (Internationally opened, globally visible) 大学にならなければならなくなった。そのためには、学生だけでなく、教員も国際的な構成に変わる必要がある。生活環境も、外国人をいつでも受け入れられるようではなければならないだろう。授業は、国際語である英語で行う。事務の人も、英語に精通し、学生と教員に英語で便宜を図れるようにならなければならない。外国から来た書類をいちいち日本語に訳さなければ受け付けないようでは困る。そんな時代ではなくなったのだ。

しかし、このような意味での国際化は決して容易ではない。私は、岐阜大の学長を辞めたあと、文科省の世界トップレベル研究拠点プログラム (World premium international research center initiative,

WPI) のプログラム・ディレクターに就任した。WPI では、国際的に開かれた研究所にするため、主任研究者の20~30%、ポスドクを含め研究者の50%以上を外国人にすることを求めている。発足以来4年にして、ようやくこの条件が整ってきたところである。

留学生を呼ぶのも大事だが、わが国の学生に世界各国に留学してもらうのも大事である。最近になり、わが国から留学する学生は著しく減少した。すでに、中国、韓国に大きく水をあけられている。英語力も、アジアの主要国の中では最低である。2010年12月、Science誌は、“Will homebody researchers turn Japan into backwater?” という記事を載せた。引きこもり (homebody) の研究者により日本の科学は取り残される (backwater) のではないか、という警告である。

留学生だけが大学の国際化の指標ではない。日本人の学生がどのくらい外国に出て行くか、大学の講義が英語で行われているか、事務職員は英語で学生と教員に対応できているか、外国人を受け入れるだけの施設が自治体にどのくらい整っているか、など広い範囲で国際化しない限り、本当の意味で、大学が国際化したとは言えないであろう。正直、国際化への道は遠いと思う。

15周年という節目に当たってのお祝いからはいささか遠い内容となったが、留学生が多い、少ないという表面の数字よりも、国際化という大きな目標に向かって、大学自身が何をしなければならないかを、この際考え直してみる必要があるのはなかろうか。そのための一文となれば幸いである。



留学生センター設置15周年を祝しさらなる発展を願って

岐阜大学名誉教授（元岐阜大学学長） 金城 俊夫

留学生センターが設置15周年を迎えたこと、本当におめでとうございます。

本センター設置にたまたま学長として係わらせていただいただけに、殊のほか嬉しく思うと同時に、これまで厳しい環境の中で諸外国の大学との交渉など難しい業務を遂行し、留学生交流事業を充実・発展させてこられたセンターの教・職員をはじめ、すべての関係者の方々のご努力・ご支援に対し、衷心より敬意と謝意を表したいと思います。

私が学長に就任した平成7年6月時点の国際交流事業の中で、外国人留学生の受入れ数は21か国、1地域から202名、学術交流協定大学数は7か国13大学で、その他に昭和62年から他大学に先駆けて開設し、高い評価を得ていた夏期短期留学コース（いわゆるサマースクール）が10名余の外国人留学生を受入れ、継続実施されていました。

一方、文部省は昭和58年度から進めていた、いわゆる「21世紀初頭における10万人の留学生受入れ計画」を加速させるため、平成2年度より、留学生の受入れ数が200名を超え、学内的に留学生に対する指導・支援体制の整った大学を対象に、毎年3大学ずつ留学生センターと留学生課を設置し、受入れ態勢の整備を図っているところででした。

これを受け、国際交流委員会等では留学生数が7年度に設置要件の200名を超えることを予測し、留学生センターの設置に向けた概算要求書を既に準備していました。

学長としての最初の仕事が留学生センター及び留学生課の設置を、地域科学部の創設などと共に平成8年度概算要求の目玉として本省折衝することでしたが、結果として、全国立大学の中で8年目に、22～24番目となる早い時期での設置が認可されました。

留学生センターの設置の経緯等については、平成10年刊行の「岐阜大学改革の歩み—改革の現状と課題—」（1994～1997）に詳述されているので割愛しますが、国会審議の遅れで予算の年度内成立ができ

ず、平成8年5月11日の発足となりました。

新設の留学生センターと留学生課の建物は旧工業短期大学の学生ホールを改修して利用することにし、センター長には専任の中須賀徳行教授が就任され、5月14日に関係教・職員共々新しい看板を掲げて開所式を行い、発足を祝った次第です。

以来15年が経過し、外国人留学生数は全国的に平成8、9年に前年比減少することもありましたが、本学では増加を続け、現在（平23・5）26か国、1地域から360名を数え、また学術交流協定大学数も15か国41大学と大幅に増加しているようです。

留学生数の増加の傾向が平成5～10年に鈍化し、特に8、9年に減少に転じた要因として、我が国の円高やアジア諸国の通貨・金融危機があげられていましたが、そういう中でも本学が大きな影響を受けることなく増加させ得たのは、本学の全留学生に占める国費及び外国政府派遣留学生の割合が全国の約20%に対し、40%を超え高率であったことに加え、留学生には大学院生、特に博士課程の院生が多く占めていたことから、本学において、平成2～4年度に博士課程の連合獣医学研究科および連合農学研究科そして工学研究科博士後期課程が相次いで設置され、拡充・整備されたことに伴い、留学生がこれら博士課程に多く入学するようになったことが大きな理由ではなかったかと推測しています。

ただ私の在任中、留学生交流事業について量的面での整備に注力しすぎ、教育・研究指導体制の整備など質的面での改善が疎かにされたのでなからうかと反省しています。

そのことに自省の念を込めて、国際交流委員会発行の「NEWS LETTER」No.25（平12）に、「留学生教育と研究指導の改善を」というテーマで、かつて東大に留学した経験のある香港出身の関志雄氏の「留学生政策の破綻」と題する「大学と学生」401号（平10）掲載の論文を引用しつつ、彼をして「日本留学は採算性の悪い投資である」とまで言わしめた評判の悪い大学院教育の実情をもう一度直視し、

教育や研究指導の在り方を留学生の視点から見直し、改善する必要のあることを訴えさせていただきました。

その後、教育・研究指導面で大きく改善されたことを知り、安堵しているところです。

一方、多様な文化的背景を持つ留学生の増加に伴い、その教育・研究指導や生活指導・相談に当たる教・職員の中に、予想外の深刻で困難な問題に直面し、心身ともに過重な負担を強いられる事例も散見されるようになり、それらへの組織的な対応が必要になってきたことと相互理解と友好の増進に寄与する国際交流の難しさも実感させられました。

ところで最近、「文部科学時報」(2011. 2)に、「大学の国際化及びアジアにおける質の保証を伴った大学間交流の推進」と題する特集があることを知りました。

高等教育のグローバル化や、学生・教員の流動性の高まりなどにより、高等教育の国際的な質保証は喫緊の課題であるとして、文科省では、まずは日中韓の3国で質の保証を伴った大学間交流を促進するための単位互換や成績評価等に関するガイドラインを作り、交流のパイロットプログラムを早急に開始することにし、そのため新年度予算に「大学の国際化」や「学生の双方向交流」関連の事業を挙げていることなどを紹介していました。

岐阜大学でも、今後の留学生交流の質を高め、その実を上げるため、留学生センターが中心になっ

て、文科省が提案するこれら事業にも積極的に応募し、特に中国、韓国それぞれの大学と質保証を伴った大学間交流を実現させてくれることを心より願っています。

ともあれ、本学における国際交流事業は学外の公的機関、各種の企業や団体、個人の方々からの留学生に対する物心両面からの温かいご支援・ご協力なしには維持・発展させることができなかつたといっても過言でなく、心から感謝申し上げる次第です。中でも、地元黒野校区の「国際交流の輪の黒野（会長 工藤治示様）」の皆様には留学生及びその家族に対し、住居やアルバイトの世話、生活用品の支給、各種イベントの開催と交流等々、年間を通してご支援をいただきました。また郡上八幡の「国際友好協会（会長 坂本由之様^註）」の皆様には、毎年サマースクールの参加学生をホームステイさせ、日本文化紹介の各種プログラムを提供し、その内容を充実させて下さいました。特に記して感謝の意を表します。

最後に、本留学生センターが次の30周年に向け、岐阜大学の国際化を牽引し、アジアを中心とした大学間交流・連携や学生交流を促進する拠点としますます発展・充実することを心からご期待申し上げますと共に、関係教・職員の一層のご活躍をお祈り致します。

(注)当時の会長。現在の会長は、鷺見幸彦氏である。



留学生に良い印象を持ち帰って

国際交流の輪の黒野 会長 工藤 治 示

この度、岐阜大学留学生センター創設15周年おめでとうございます。記念誌の発行に、私達にも機会をいただきまして、ありがとうございます。思いつくままに寄稿させていただきます。

「国際交流の輪の黒野」の活動は、岐阜大学（岐阜市黒野地区）が近くに移転されたことで、徐々に留学生が地域内で生活されるようになり、ホームステイをはじめ、暮らしの支援をする人が増え、個々の活動より共同体で進めようと7名で、平成6年11月にボランティア組織を結成しましたのが、この会です。

当時、具体的な支援と大学の留学生係の先生にお力添えをいただき、留学生に対してアンケートを実施し、住居・アルバイト探し、日常生活用品が求められ、黒野小学校（校区内）にチラシを配布、各種団体の人にも周知し協力をお願いしました。直に多くの方より支援物品の提供があり、メンバーが東奔西走し、感謝しながら処理に当たった事を思い出します。

慣れない土地で生活すること、言葉も理解出来ない点があり、外国人留学生と住民（黒野）が身近に交流できるように橋渡しをしようと、メンバーの柿畑（岐阜市洞地区）の一角でカキ狩り・焼肉パーティーを企画し、岐阜大留学生に呼びかけ、地域のボランティア・大学の留学生課の先生方を含め、60余名で、この会の組織発会式を兼ねたイベントを催し、賑やかに楽しい、ふれあいの場でした。

以後、メンバーのイチゴ畑（岐阜市古市場）でイチゴ狩りを4月に、秋には収穫祭（芋煮汁）をしまして年を経てきました。

現在のイベントは、平成23年4月2日黒野城址公園で、桜の下で、130余名で花見会を開催、17年目と続いています。「ハローイン くろの」です。

昼食に、大好評のカレーで、イスラム圏の留学生用には、モスクでお祈りを捧げた肉や具材を使用し、カレーを調理しふるまい、輪投げ、グランドゴルフなど楽しくプレーし、日用品の景品取りに懸命にチャレンジし交流会を盛り上げていました。

同じく17回目を迎えます「もちつき大会と日本のお正月」も、12月中旬に企画しています。特筆は、昨年より地元の岐北中学校（岐阜市御望）のボランティア女子生徒が、10数名参加してくれています。感謝です。

メンバーも現在11名ですが、家族の応援と知人の支援、常時ご協力いただく岐阜市青年団OB会・黒野青年OB会・周辺地域のボランティアの皆様、岐阜市国際交流室の先生方のご支援で継続できると信じています。

勿論、岐阜大学の特に留学生センターの先生方との連携を密に、毎年新入学留学生を迎えながら地道に活動をしていきたいと思えます。

留学生の皆さんが、日本に良い印象を持ち、岐阜の、そして黒野にある大学で学んで、よかったと国に帰っていただきたいと願い、留学生センターの先生方をはじめ岐阜大学の先生方の温かい心遣いを変わりませずお願いし、地域住民と共に、微力な活動を続けてまいります。

メンバーも年令が高くなっていますが、中核として頑張ります。よろしくお願い申し上げます。拙文にて失礼ながら、お慶びの言葉といたします。



留学センターとの絆（設立15周年に寄せて）

郡上八幡国際友好協会 会長 鷲見 幸彦

留学生センター15周年、おめでとうございます。

私ども郡上八幡国際友好協会（以下 GIFA）と岐阜大学の関係は16年前まで遡ります。1995年11月の「岐阜大学留学生との交流会」が端緒となり、翌年の GIFA 事業計画には、「岐阜大学とのふれあい事業」が入ります。内容を見ると、「岐阜大学へ留学している学生を（7月第1～第2週頃）招き、地域交流を図る。」「従来の学習型のサマースクールから、ふれあい型のサマースクールを目指し郡上八幡独自のサマースクールを開催する。」とあります。

（※注ここで従来と言っているのは1990年から95年まで行った北米学生を対象としたサマースクール＝国際教育交流事業を指す）

この時から郡上八幡という田舎の小さな城下町で、岐阜大学サマースクール留学生のホームステイと日本文化体験講座が始まったのです。以後毎年続けられ東日本大震災・原発炉心溶融事故のあった今年も着々と準備が進んでいます。思えばこれまでに300人以上のスウェーデンのルンド大学や韓国ソウル産業大学^(註)などの学生を受け入れてきたことになります。

受入が始まったころの郡上八幡は、まだ平成の市町村合併前の郡上郡八幡町でしたので、この八幡町と郡上市について簡単に紹介をさせていただきます。当時のキャッチフレーズは「水と踊りと心のふるさと郡上八幡」でした。四方を山々に囲まれ、密集した市街地を南北に分けるように中央を吉田川が流れ西方で長良川と合流します。多くの寺社仏閣と町家千軒とも言われる民家や商家を擁した古い町並みがあり、両側には水量豊かな用水が引かれています。宗祇水と呼ばれ名水百選に選定された湧水もこの一角にあります。この町を歩きそのたたずまいに日本を感じる外国人も少なからぬようです。夏には郡上踊りが毎晩のように行われます。ホストファミリーと共に浴衣を着て踊りの輪に加わり郡上踊りに強い印象を受け、格別の思い出を作ってゆく留学生もとても多いように思います。

郡上市になってからはホストファミリーも、多く

のスキー場を擁する高原リゾート地の高鷲町や白山信仰美濃馬場のあった白鳥町、南はラフティングの盛んな美並町と市内一円に広がっています。

郡上の紹介に続いて留学生に係る思い出を二つほど記します。

ある中学校で交流をした際、食文化を含めた双方の文化紹介を行いました。スウェーデンの学生は自国の特徴的なお菓子を生徒に配りました。一方生徒は五平餅を出してくれました。その時は気付かなかったのですが味噌だれの中に胡桃が入っていたのです。食べた女子学生はナッツアレルギーだったため即座にアレルギー反応を起こし真っ赤になり苦しみ始めました。本人は食べてすぐに気付いたようですが手遅れでした。すぐに予定を変更し急ぎ病院へ走りました。幸い翌日には回復して大事には至りませんでした。当日のホストファミリーはお断りすることになりました。

これ以来、食事やアレルギーには一段と注意するようになりました。近年はイスラム教の青少年の受入も多いのでホストファミリーへの事前説明は勿論ですが、レストランや仕出し屋さんとの献立や食材に関する打ち合わせが欠かせなくなっています。

もう一つ比較的最近の失敗談です。日本文化体験講座の中に座禅体験を入れた時のことです。過去何度かやっていたためお寺との打合せが不十分でした。そしてその日はいつもの住職ではなく若僧でした。そのため多くの日本人が座禅から連想できる「警策」で打つという行為とその意味の事前説明が抜けてしまいました。たまたま打たれた学生は、「背後から棒で打たれた」事に大きなショックを受けたのです。反省会の時に言ってくれたので、警策の説明をするとともに謝罪をしたのですが、理不尽な暴力と感じ戸惑い傷ついた事は明らかでした。文化の違いと説明の大切さを痛感しました。

さまざまな事がありましたが、最終日に集めた学生達の元気な笑顔と反省会でのスピーチ、ホストファミリーとの別離の光景は、毎回お手伝いできて

良かったと感じるひと時です。また東日本大震災の際に複数のホストファミリーから「ホームステイした学生から安否を気遣った見舞いの連絡があった」とのうれしいご報告を頂戴したことも加えておきたいと思います。

再度、岐阜大学との関係に戻ります。GIFA との絆を語る上で触れるべきことが二つあります。

一つは2001年に国の留学生受入れ制度100周年記念事業に際して留学生交流功労団体として文科省から表彰していただいた事です。この身に余る栄誉は、岐阜大学からの推薦があつてのことと承っております。本当に感謝しています。

二つ目は、私ども友好協会の設立20周年の記念事業において企画した、外国にルーツを持つ郡上市民を対象とした「作文コンクール」の審査委員長をお引き受け頂いたこと。もう一つの企画、外国人によるディスカッション「語ろう！郡上の魅力」では、日研生（日本語・日本文化研修留学生）の参加依頼と司会進行までお願いしご快諾をいただいたのです。どちらの企画も成功し好評を博したことは言うまでもありません。日研生の皆さんにはディスカッション以外にも市内中学校での交流事業やもみじ祭りの参加など何度も来ていただいています。小林センター長をはじめ留学生センターの皆さん、本当にありがとうございました。

さて私たち GIFA の活動にあつて岐阜大学のサマースクールを始めとした留学生や海外青少年の受入と交流事業は21年余に亘つて続けてきた大切な事業です。多くの皆様方の協力を仰ぎながら今後とも継続し地域や地元の学校との関係をより深めながら進めていきます。

さらに、ここ数年間取り組んできた多文化共生に係わる事業が私たちの活動のもう一つの柱に育ってきています。ご協力いただきました「作文コンクール」もその一環でした。郡上市は外国人散住地域であり構成比率も高くありません。しかし外国出身市民に優しく暮らしやすい環境づくりは、そこで生活する誰もが住み易い心地良い街づくりになり、高齢化の進む郡上市の活性化と発展にも繋がっていくと考えています。だからこそ市の多言語生活ガイドの作成に関わり、また多くのボランティアとともに日本語教室を開催してきました。地域の国際交流の一環として今後とも岐阜大学からのより一層のご支援やご指導、アドバイスをいただけるよう願っています。

最後に岐阜大学と留学生センターの益々のご発展を期待するとともに、教職員の皆様と留学生の皆様のご活躍を心からお祈り申し上げます。

(注) ソウル産業大学は、2010年9月から「ソウル科学技術大学」に改称された。



多言語・多文化の架け橋としての留学生センターの発展を

岐阜大学名誉教授（初代留学生センター長） 中須賀 徳 行

はじめに

岐阜大学に留学生センターが創立されたのは、15年前の1996（平成8）年5月11日であるが、私が定年で留学生センターに別れを告げたのは2003年3月であったから、7年間つまりこの15年のほぼ半分の期間そこでお世話になったことになる。センター設立の経緯は年報の第1号¹⁾にその概略を述べたし、大学を去るにあたって、個人的な回想を紀要²⁾に書かせていただいたので、なるべく重複を避けながらその後の感想も含めて述べさせていただきたい。

留学生10万人構想

センター創立のころの日本にはおよそ5万3千人の外国人留学生が在籍していたが、それを21世紀の早い時期に10万人にすることが国策であった。なぜ10万人なのかというと、10数年遡る1983年当時、日本の留学生数は10,428人で、アメリカ30数万人、フランス128,350人、ドイツ74,267人、イギリス45,416人に比べて明らかな差があったので、せめてフランス並みにということであつたらしい。それより少し前、東南アジアを訪問した中曽根康弘首相は、日本留学の経験がある現地の人から、「留学したときに不愉快な思いをしたので、自分の子どもを日本に留学させようとは思わない」と告白されて衝撃を受けたという。

私はたまたまそのフランスのリヨン大学に1973年から2年間留学したが、確かにフランスの留学生政策は充実していると感じた。フランス政府給費留学生の身分だったので、他の留学生より恵まれていたということもあるが、食住という基本的な条件をきちんと保証していると感じた。奨学金は月700フラン（程なくして1000フラン）だったから、今の日本だと10万円を切る程度の金額で、決して楽なものではなかったが、学生寮に住んで学内のレストランで食べていたら、何冊かの本を買う程度のことは可能であった。何しろ数百円程度の値段で、肉や果物も付いたフルコースの食事が食べられるのである。も

ちろん、フランス語を教える言語センターも設置されていて、週に1、2度通ったこともある。しかしうがった見方をすれば、これはかつての植民地宗主国フランスの国際的な政策であるとも言える。したがって、アフリカの国々やヴェトナムからの留学生も多く、流暢なフランス語を話した。

さて、「大国」を意識する中曽根首相は帰国後すぐに留学生政策の抜本的な改革を指示した。かくして1983年、文部省の私的諮問機関であった「21世紀への留学生政策懇談会」がいわゆる「留学生10万人構想」を答申したのである。21世紀早々に10万人を達成するという数値的目標が、とりわけ事務レベルからは強調されがちであったが、勉学条件の改善や日本での生活を居心地の良いものにするための環境整備が大きな課題であった。

国際交流の進展と留学生センターの設立

それ以後文部省は、日本語教育の充実や留学生担当教職員の増強などに取り組むとともに、留学生用宿舍の整備や奨学金の拡充などに努めてきた。また、地域留学生交流推進協議会を県ごとに置き、自治体の国際化、例えば国際交流協会のような組織の設置あるいは強化を支援してきた。国立大学にあっては、日本語・日本事情の教育、留学生に修学上および生活上の指導・助言を行うこと、ならびにそのための調査・研究を行うことを主な目的として、文部省は省令の留学生センターを設置することにしたのである。

「21世紀への留学生政策懇談会」が「留学生10万人構想」を答申して以降、次々と省令の留学生センターが生まれることになったが、最初に設置されたのは東京大学・京都大学・広島大学で、1990年のことである。それ以後毎年3校ずつ設置され、中部地区としては名古屋大学に1993年設置されたのが最初で、ついで2年後に金沢大学にも設置された。戦後の留学生教育のなかで、東京外国語大学と大阪外国語大学は特別な位置を占めていたが、そこでの留学

生日本語教育センターを加えると、1995年の時点で20の留学生センターが存在していた。

留学生センターの設置には本省から一定の条件が課せられていて、その一つは留学生数が200名を超えているということであった。留学生センターの設立が岐阜大学の国際交流委員会で具体的に検討され始めたのは1994年頃であるが、その年の岐阜大学の留学生数は194名であったから、200名という数字はクリアできるという見通しがたつようになっていた。むろん数だけの問題ではなく、留学生教育や国際交流の実績も問われるわけであるが、それにはある程度の自信を岐阜大学は持っていた。

それまで国際交流室という全学体制の組織があった、日本語教育や国際交流、とりわけサマースクールの実施に、室員は手弁当で献身的に永年努力してきた。私はあるとき名古屋大学留学生センターが主催する「国際交流の体験交流会」に出て岐阜大学の経験を話したことがあるが、その時の主題はサマースクールの実施体制で、岐阜大学ではどうしてそういう全学体制が組めるのか不思議だという、羨望をこめた質問を受けたことがある。その意味では、永年国際交流などに貢献してこられた先輩諸氏の努力の賜物であると思っている。

設置についてはもう一つ大きな要因があつて、それは当時教養部を廃止して、新しい学部を作ろうという流れがあつたことである。教養部の廃止については教育の質的低下を招くのではないかという不安もあり、私もそうした見解に多くの点で共鳴していた。実際、廃止後の学生の基礎的学力の低下を見ると、もう一度基礎学力をどうするか、総合的な判断能力や批判精神をどう醸成するかという大きな課題が残されたように感じている。しかし、戦後の高等教育の矛盾を集中的に抱えていた教養部の廃止は流れに掉さすのが難しい勢いを当時持っていた。

大学全体としても、学長を長とする「教養部組織改編検討専門委員会」が1992年9月に作られ、検討が始まっていた。教養部の内部でも改革案が長らく議論されてきていたが、1992年10月には「教養部組織改革委員会」が誕生し、留学生問題にも関係するということで私も委員の一人として議論に参加した。土曜日も毎週大学に顔を出して、100回以上も議論を重ねた。教養部を解散し、教員を他学部配置換する可能性もあつたが、岐阜大学は理系に偏っていたので、文系ないし文理融合型の学部を是非とも新設したいというのは、加藤晃学長を初め学内の

かなりの支持を得ていた。

当時の文部省は、「福祉・国際・地域」のいずれかでなければ学部新設を認めないという方針だったので、私自身は「国際学部」を主張したこともあつたが、宇都宮大学に先を越されてしまった。そのうち、どうやら岐阜大学に新設を認めるらしい、また留学生センターの創立も可能らしいという情報が入ってきた。学部名としては上述の事情から結局「地域科学部」となった。

定員削減が声高に叫ばれていた当時の国立大学で、人員の純増が可能なのは、地震と留学生関係だけだと言われていた。そういう背景もあつて、全国の国立大学は留学センターの設置を認めてほしいと競っていたのである。そういう流れであつたから、いわゆる地方大学の岐阜大学に留学生センターが創立されるというのは多少の驚きをもって迎えられ、設立に向けて尽力してこられた事務系の人にとっては喜びもひとしおだつたようである。無論、数年にわたって議論に参加してきた教官や私自身にとってもうれしい知らせであつた。

留学生センター・留学生課の充実と英語による教育

岐阜大学の日本語教育では中級クラスが手薄であつたが、留学生センターの創立によって、2名の日本語・日本事情担当教官に加えて2名が増員となり、全学的には初級・中級・上級の日本語コースがひととおり揃い、留学生相談部門も教官1名ではあるが誕生した。事務的にも留学生課という独立した課が生まれ、本省からの辞令による課長以下、専門職員・留学生係長・留学生センター係長に事務補佐員も加えると総勢7人の事務局を擁することになり、センター専属の事務補佐員も採用となった。

最近全国の留学生センターはどうなっているのか調べてみたところ、全部で54のセンターがあるが、国際交流センター（京都など）・国際教育交流センター（大阪など）・国際センター（広島や新潟など）などと名称を変えているところもある。それぞれの大学で事情が違うのであろうが、ともかく半数以上の国立大学に留学生のためのセンター組織が存在するわけである。

かつて10万人を目指した留学生数も2003年に数の上では達成し、現在は30万人構想が発足している。その一つの目玉は「英語による授業」であるという。そこで、留学生センター長時代から考えていたことについて、私見を述べてみたい。実は以前から本省

は、留学生に対して英語で授業を行う特別コースを設けるよう奨励していた。しかしアメリカやフランスに留学して、日本語で授業を受けたいと思う日本人留学生がいるであろうか。留学した国の言語を学び、それを通じてその国の文化や社会を理解することが、深い意味での国際交流に繋がるのではないだろうか。

現在英語が隆盛をきわめ、それを母語とする人は3億人余とそんなに多くはないが、第2言語を含めると13億人ほどになるという。学術文献も英語で書かれることが多いのは事実である。「英語を第二公用語に」という議論³⁾もあつたくらいだし、今年からは小学校でも英語教育が始まった。水村美苗⁴⁾が日本語の滅亡に関する著書を著してベストセラーになる時代ではあるが、日本ほど英語一辺倒の国は珍しいと思う。

中等教育で考えた場合、ヨーロッパの国々でも英語の履修率は一番高いが、たとえばドイツやイタリアではフランス語を学ぶ生徒は25～50%いるし、逆にフランスはドイツ語やスペイン語を4～25%の生徒が学ぶというように、色々な言語が学ばれている。サマースクールで岐阜大学に来たルンド大学生やアメリカ人研究者と、フランス語で話したことがある。中国の英語熱も伝えられているが、中国の学生も欧州と同様に多様な言語を学んでいる。

欧文による日本人の姓名表記について 一東アジアとの共通点を見つめて

センターの紀要などとも関連して、文書などで姓名を欧文表記することについて少し述べてみたい。日本人は欧文で表現するとき姓と名をひっくり返してきたが、同じ東アジアの他の国の場合は英字新聞などでもそのままである。周恩来はChou En Lai, 金大中はKim Dae Jung だし、ヴェトナムのホーチミン(Hồ Chí Minh)も漢字なら「胡志明」である。英語が事実上の共通語であるシンガポールを率いてきたリー・クアンユー(Lee Kuan Yew)も、「李光耀」そのものである。

ところで、日本人が最初に編集した大型英和辞典『英和対訳袖珍辞書』は、1862(文久2)年に幕府の洋書調所から堀達之助の指導の下で発行されたが、そこには英文による初の「前書き」があり、HORI TATSUNOSKAY という署名が見られる。その9年前にペリーが初来航した時、“I can speak Dutch” と呼びかけたのがこの堀達之助(当時首席通詞)で

あつたが、これは日本人が国家的な外交の場で初めて発した英語とされている。その改訂・再版は堀越亀之助が主導したが、その序文にはやはり HORIKOSI KAMENOSKAY の署名がある。初版の原本は現在20冊が発見されていて、そのうちの1冊は東濃の岩村にあるが、再版本は岐阜大学の図書館にあることを付言しておきたい。達之助の子孫にあたる堀孝彦氏からの私信によると、達之助は生涯姓名の順を守ったそうである。

ところで近年の中学校英語教科書ではかなり劇的な変化が起きていて、日本式の姓一名順になってきている。このような変化を促したのは、全国の英語研究者たちの努力の結果でもあるが、もう一つの要因は、2000年12月26日に出された国語審議会の答申であると考えられ、次のように述べられている:「人類の持つ言語や文化の多様性を人類全体が意識し、生かしていくべきであるという立場から、そのような際に、一定の書式に従って書かれる名簿や書類などは別として、一般的には各々の人名固有の形式が生きる形で紹介・記述されることが望ましいと考える。したがって、日本人の姓名については、ローマ字表記においても「姓一名」の順(例えば Yamada Haruo)とすることが望ましい。なお、従来の慣習に基づく誤解を防ぐために、姓をすべて大文字とする(YAMADA Haruo)、姓と名の間にコンマを打つ(Yamada, Haruo)などの方法で、「姓一名」の構造を示すことも考えられよう」(第22期・第3分科会)。

翻って我が留学生センターの紀要を見てみると、当初から姓一名の順になっている。

私自身も名刺の英文表記は岐阜大学時代からは NAKASUKA Noriyuki にしていた。思い起こすと30数年前、フランスの市役所で外国人登録する際に、CURIE Pierre(姓はすべて大文字)のように姓一名の順に書くよう指示され、フランスでも公式文書ではそうなのかと驚いたが、ドナルド・キーンも20年ほど前の名古屋大学における講演で「日本人はなぜ夏目漱石をソーセキ・ナツメと言うのでしょうか」と問いかけたのであつた。センターの紀要は、国語審議会の答申に先じたのである。

多言語・多文化交流の場としての留学生センター

大学、特に留学生センターには様々な国籍の学生や研究者がやってきて、そこでは多様な交流が生まれる。なにしろ世界には6千前後の言語があるのだ

から、当然言語や文化も違っている。日本に来る留学生の約90%はアジアの学生であり、特に中国からの学生は多く、岐阜大学もその例外ではない。

去年は生物多様性に関する締約国会議（COP10）が名古屋で開かれ、私もそのフォーラムに参加したが、その基調報告に立った著名な霊長類学者 R. ミッターマイヤー氏は、「多様な言語を維持することは多様な文化を守ることであり、生物多様性にも通じることである」と話していた。留学生センターでは日本語が中心となるのは当然としても、多様な言語的・文化的な交流の場となり、そこから真の異文化理解が生まれてくることを心から願うものである。

参考文献

- 1) 中須賀徳行「岐阜大学留学生センター設立の経緯」『岐阜大学留学生センター年報』第1号, p. 4, 1998
- 2) 中須賀徳行「国際交流室から留学生センターへ～国際交流についての個人的回想～」『岐阜大学留学生センター紀要 2002』, p. 3, 2003
- 3) 「21世紀日本の構想」懇談会（河合隼雄座長）『日本のフロンティアは日本の中にある―自立と協治で築く新世紀, 総論』講談社, 2000
(そこでは「長期的には英語を第二公用語とすることも視野に入ってくるが、国民的論議を必要とする。まずは、英語を国民の実用語とするために全力を尽くさなければならない」と述べられている。)
- 4) 水村美苗『日本語が亡びるとき 英語の世紀の中で』筑摩書房, 2008



留学生交流が輝く大学へ

岐阜大学名誉教授（第2代留学生センター長）

堀内 孝次

岐阜大学留学生センター創設15周年記念の依頼原稿の筆を執った時、即座に脳裏に蘇ったのは、十数年間にわたり私と共に喜びや苦しみを分かち合った多くの留学生や教職員、それにボランティアの方々の懐かしい顔や姿であり、在りし日の思い出の場面やその折々の印象的な言葉の記憶であった。

思えば岐阜大学在職中の30数年間、身近にはいつも留学生が居た。なかでも、留学生センターとその前身の国際交流室、そして留学生センターへの移行過程にあった国際交流センターの1年間も含め、13年間もの長きにわたってこれらの留学生支援機関に深く関与できたのは、私の大学生活にとって意義深くかつ大学人としても国際感覚を養う上で大変幸運なことでもあった。今改めて岐阜大学の留学生センターが中部地方の近隣国立大学の中でも比較的早く設置された経緯を思い出しながら室長やセンター長として過ごした日々を振り返ってみたいと思う。

本学の国際交流黎明期の頃（昭和58年）、私は農学部（現在の応用生物科学部の前身）選出教官として新規開設された国際交流室の室員を担うことになった。私の初仕事は、藤掛庄市初代国際交流室長（教育学部）から「近くアラスカ・フェアバンクス校から副学長が来学し、講演されるので、その際の意見交換時に交流室員諸君は何か質問をするように」との指示に応えることであった。講演会当日は、大学内外からも多数の参加者があったが、講演後の質疑応答時には出席者からの発言は全く無かった。私は室員としての責任感から“勇気”を出して講演内容について少々批判的な質問をした。室員としてのこの仕事をきっかけに、その後も学部代表として国際交流室員会議を通じて長く留学生対応に関わることとなった。因みに、この年の留学生数は僅か49名であった。

国際交流室の年間事業は、協定大学から留学生を受け入れるサマースクールをはじめ、全学の留学生を対象とした国際理解教育、日本語日本文化教育、日本事情、ホームステイ関係、会計・渉外、広報、

エクスカージョンなどで室員が分担して企画・運営を行っていた。また海外への留学を希望する学生達に留学情報提供などの支援もしていた。国際交流室組織は、各学部等の代表教官から成っていて、室長と13名の室員に加えて2名の補助職員（非常勤事務員；日本語教育対応と海外事情対応の事務）から成り、学生部からは専門職員一人が室員会議に参加していた。国際交流室開設当初、留学生の日本語指導は一般市民のボランティア活動によって支援されていたし、チューター役をしてくれた学生達の善意や企業からの浄財による財政支援が国際交流の推進に大きく貢献していた。協定大学との渉外業務は実質的に室長が大学の国際交流担当責任者として対応していた。この国際的な交流事業が安定し、定着していったのは藤井洋2代目室長（工学部）の鋭敏かつ闊達明朗な国際感覚と適切な室員会議の運用手腕によるところが大きかった。

昭和60年前後から留学生の受け入れ拡大が国策として実施されると、室員達は新たなサマースクール用宿舎を確保するのに懸命に努力した。一時的ではあったが民間企業（日建産業株式会社）の社員寮を宿舎に利用させて頂いたこともあった。その後、長良地区に在る大学付属の学外合宿研修施設が宿舎として改修され、増加する留学生を受け入れていった。国際交流室員が関係する留学生の歓送迎会やクリスマスパーティ、ホームステイファミリーとの交歓会、機関誌「NEWS LETTER」の発行、国際理解の集い、留学生に関するデータベース作成などの諸事業は、学内の他の諸委員会活動とは極めて異質で、常に国際理解を意識した地域対応の活動や行事が多かった。対外的な主要行事には学長も積極的に参加され、これらの事業実績が全学に理解されるに及んでやがて国際交流室活動は全学的に認知される場所となった。

サマースクール開校前に長良の学外研修施設の汚れた窓枠や畳などを雑巾で拭きながら「何故このようなことまでしなければならぬのか」と自問しな

が汗を流したことが昨日のように蘇る。こうした教官達の地道な努力と留学生との交流経験を経てサマースクールの内容も徐々に充実し、事業評価も高くなっていった。この頃、大学全体の留学生数は178人であった（平成5年）。そして学生部学生課に国際交流事務室が置かれ、室長、2係長など事務の国際交流体制が強化されると、国際交流室と学生課との相互乗り入れによる事務の一元化が図られ、交流室補助職員2人も国際交流事務室の国際交流係員となった（平成7年4月）、これ以降、国際交流は教員と事務職員が交流推進のための車の両輪となっていった。日本語指導も、市民ボランティアに替わって、有資格者の日本語専門指導者が担当するようになった。

国の留学生10万人受け入れ政策は、平成15年に目標が達成された。当初、この計画を実施するのに当たっては「留学生受け入れ増による日本語習得レベルの低下が懸念される」と危惧する一部室員からの声もあったが、3代目の国際交流室長だった私は、国際交流の充実と発展を念頭に留学生受け入れ増の推進に努力した。そしてサマースクールもルンド大学（スウェーデン）の8週間コースに加えて、ソウル産業大学^(註)の留学生を対象に短期3週間コースを開講することになった（平成7年）。また、国際交流室は、本学の学生を海外に派遣する業務にも学生部と協同しながら協定大学との交流を深める役割を果たしていった。この年、留学生受け入れ増に応じて施設面でも54名の宿泊が可能な国際交流会館B棟が竣工した。小澤克彦国際交流委員会委員長（教育学部）と私は、当時の加藤晃学長に国際交流事案について頻りに面会し、事業推進の支援と助言をお願いすることが少なくなかった。多忙な中でも大学の国際交流発展に常に積極的に協力的な学長の姿勢に私達は学長に対する強い信頼感と温かい親近感を感じた。自分達が岐阜大学の国際交流を担っているのだと強く自負し、責任を意識したのもこの頃で、協定大学の実情調査にも勇んで海外出張した。藤井洋前室長から各種の事業実施に当たって国際交流室と学生課との協調姿勢を高く評価して頂いたのが嬉しかった。まさに本学国際交流の急速な発展が見られ、特に、ルンド大学の学生を定期的に受け入れたサマースクールは、日本の国立大学の交流モデルとなっていた。

オーストラリアのグリフィス大学ゴールドコースト校が岐阜大学を協定を結ぶ候補に選んだ理由は、

大規模な大学では何かと事務的に措置されることが一般的なもので留学生の少ない地方大学の方が良い交流ができると考えていたところ、日本での大学案内等の資料から「地方大学にあって国際交流が盛んである」ことを知ったからという。ルンド大学も既に同様の理由で本学を選んでいった。

ある年、私は、本学を来訪されたルンド大学国際交流担当関係者達との交流会議で、「岐阜大学は地方大学の一つで、規模は大きくは無いが、留学生の国際交流に関しては、同規模の国立大学の中ではひとときわ光り輝くことを目指したい」とスピーチしたのを覚えている。国際交流室の役割は、単に留学生の日本語教育だけの大学付属施設では無く、「大学全体に共通する海外からの留学生や本学の派遣留学生の国際交流事業に深く関与し、また協定大学との関連から研究者も含めた大学の国際化促進に積極的に寄与すること」という思いで活動していた。この考えは後の留学生センター長の任期中もセンターの位置づけとして心中変わることでは無かった。

平成6年10月時点で、留学生数は204人に達しており、日本語授業も留学生の日本語能力に応じて中級と初級クラスに分けての複数開講となってカリキュラムも改善されていった。こうして留学生の交流実績が蓄積される中、留学生センター設置概算要求のヒアリングに須崎学生課長と文部省に出向いたのが平成7年、その翌年に待望の留学生センターが設置された。

私がセンター長として就任したのは、国際交流センター主事から離れて数年後、初代の中須賀德行センター長に次いでであった。就任して落ち着く間もなく岐阜大学留学生センターの現状説明と関連情報の入手のため当時の荒木留学生課長と文部省大学課の留学生担当部署を訪ねたのを思い出す。センター長2期4年間を振り返れば、有能な3人の課長（荒木、北条、竹原の諸氏）達と国際交流の発展に向けてセンターの運營業務を共にできたことも深く印象に残っている。

センター長の任期中に手掛けたこと、それはまず英語に堪能なセンター長秘書を兼任する非常勤職員を初めて採用したことで、この若い力はその明るい雰囲気と共にサマースクールの留学生対応を通してセンター全体の活性化につながった。そして、当時止むを得ず分散していた一部専任教官の居室をセンター棟内部の一部改修によって会議室と共に確保したこと。さらにセンター独自のカリキュラムを充実

させるために、私も工学部の留学生担当教官と分担して日韓理工系学部の留学生（国費外国人留学生）を対象に授業科目（担当分野：環境保全と食の安全性）を開講した。これには自分は学部との兼任ではあるが、常にセンターの「一職員、一戦力」でもあるという強い意識をいつも持っていたからだ。また懸案の人事3件を終えるとともに厳しい社会情勢の中で法人化組織となった岐阜大学で留学生センターとして初めて実施した自己評価も重い仕事だった。確かに、留学生センターは規模的には学部よりも小さいものの、専任教官5名と学生部の留学生課長以下、専門員や非常勤職員など多数の職員が配属されており、省令施設として独立した組織である。センター長職はほぼ学部長と同様の管理業務に加えて国際交流事業に関する海外との折衝や協定大学等からの来学者あるいは留学生や日本語教育に関する地域の自治体や住民との対応を日常的に行うなど学内でも特異な役職といえよう。

そんな中、私は研究室の専攻学生に少々寂しい目を会わせていたと悔やんだことがあった。学部との兼務となって、彼らと向かい合う時間が少なくなっていたからだ。大学院学生の一人が晴れて修士課程を修了する時に、少々笑みを浮かべながら「先生と話し合える時間が十分なかったのが残念でした」と本音をこぼしたのを、指導教官として大変辛く感じ、兼任の厳しさを味わった。

4年間の任期を全うしてセンター長の任を離れる時、全学の留学生数は380人を超えていた（平成16

年）。センター関係の教職員に改まって送別された次の日、私は13人の専攻生（留学生5名）の指導に専念するため応用生物科学部の作物栽培学研究室へ戻った。その後、平成18年度に留学生数は最大の452人となったが、私が停年退職した平成20年には365人まで減少し、現在もほぼ同数であるという。そんな中、文部科学省は最近「留学生30万人受入れ構想」実施の環境づくりに入り始めている。一体、留学生の受け入れ数は大学規模（教員数）からみてどの程度が適切なのであろうか。それは恐らく各教員の留学生対応能力と収容施設や財政確保も含めた受け入れシステムの内容が大きく影響するであろう。かつて地方大学として留学生交流が輝いていた岐阜大学の長は、大学法人化の下で最早その魅力を失せてしまっているのだろうか。それとも本学が意図する教育研究レベルを維持する上で既に受け入れ限界にまで達してしまっているのだろうか。いずれにせよ国際交流の真の大学評価は、ホスト大学を出た学生達が国際社会から如何なる評価を受けるかにかかっている。これには大学自らが教育研究機関として常に的確な社会対応のできる体制づくりを心がけることが良質な国際交流を図る上で肝要であるように思える。とりわけ大学全体を構成する教職員各人の国際化対応の向上に一層の努力を望みたい。

（注）ソウル産業大学は平成22年9月から「ソウル科学技術大学」に改称された。



留学生センターの新たな挑戦にむけて

地域科学部教授（第3代留学生センター長）

ジョン・G・ラッセル

留学生センターが岐阜大学に設置されてからもう15年が経ったのだと思うと、2004年から2年間と短い期間ではあったがセンターの仕事に携わった者として感慨深いものがある。

この15年の間、センターは様々な国から留学生を受け入れ、日本語教育と生活の支援や指導などをし、彼ら・彼女らの日本語と日本文化や社会の理解を深めると同時に、岐阜大学周辺の地域社会とのふれ合いの場を提供することによって国際交流と理解に多くの貢献してきたことは周知の事実である。

しかし、一方では残念な動向も現れている。海外留学を希望し決意する日本人の若者が2004年をピークに減少し続けている（中国とその他のアジア諸国を除く）。実は、岐阜大学もここ5年間で海外に留学した学生は、指を折って数えられる程度といわれている。

これでは多くの日本人学生が他文化を直接に深く肌で体験してみることや、現地の人との交流により日本文化を広めていく事ができない。また、せっかく学校で学んだ言語教育を応用し、実践する機会を失ってしまうのは大変残念であり、嘆かわしいことでもある。海外へ留学する日本人の数がもしもこのまま減少し続けると、現地で日本社会を理解してもらうための一つの重大な窓が閉ざされてしまうのではないかと憂いをいだいてしまう。

これまで日本の文化や言語を伝える役割を担って来た日本人留学生の代わりに、これからは日本文化や言語を理解してもらい、相互理解を深める役割は必然的に日本で学んだ外国人留学生が引き受けざるを得ない状況になるのではないかと危惧する。その意味でも留学生センターの存在意義は今後ますます高まると思う。

他方、国内外の事情に左右されやすい現代のグローバルな世界の国境は、非常に浸透性が高く、世界の出来事が瞬く間に地元波及するだけでなく、現地の出来事と世界的な出来事の境界線も曖昧になっている。

このたびの東日本大震災と福島原発問題からも少なからず影響を受け、今まで日本で学んでいた留学生が戻って来ない、あるいは留学を希望する人が減っているという事態が起きている。これまで日本政府が掲げて来た留学生を増やす計画にもブレーキがかかってしまったように見える。これは日本の中でも大地震に見舞われた東北のある一部の地域と福島原発が引き起こした事故というローカルな問題が大きな波紋を引き起こし、グローバルな問題として日本全体が影響を受けているということがよく分かる。

しかし、悪い事ばかりだけではなく、この未曾有の災害に苦しむ被災者の元には多くの国から救援隊が訪れ、救助活動や支援をしてくれた姿や、海外から沢山の義援金や心のこもったメッセージが日本に寄せられ、それらに勇気をもらい、感動した人が多かったと思う。

今まで交流の少なかった国や、国際問題や軋轢のある国からも暖かい手が差し伸べられた。これらは悲惨な映像の力だけではなく、日頃から日本において地道な活動を続ける人々、また、日本に縁を持つ人々のお陰でもある。もちろん留学生センターに携わる人々が大きく寄与したことは言うまでもない。

一連の出来事を見ていると、今は日本に来る留学生の減少はいたしかたないと思うものの、人々の行動する勇気や善意には希望の光が見える。きっとまた再び、海外の人々が魅力ある日本に学びたいと思い、行動するときがそう遠くない時期に来ると思う。

急激に変化し、グローバル化しつつある現代社会にとって、留学生センターの役割は単に留学生に日本文化と言語を教育し育成することだけではなく、学生と共に地域社会を21世の国際的な実情に挑戦するような準備をし、訓練させる場にするということでもある。

日本人学生が内向き思考になり、海外に対して興味を持たず、留学意欲も減少し、外の世界との接触

が少ない現在の状況を克服するためにも、センターで学ぶ留学生と共に学び、鍛え、成長できる場を新たに設けられることを願う。

これからは、他文化を共に体験でき、言語も交流により互いに学習することができるような役割と機

能を併せ持つ留学生センターになることを期待する。決して多くはない職員で奮闘されていることに敬意を表し、留学生センターの更なる活躍と発展を願って止まない。



(設置当時の留学生センター)



(現在の留学生センター)



ある記憶

岐阜大学名誉教授（第4代留学生センター長） 武脇 義

まずは、留学生センター創設15周年を迎えられたことに対し、学内外の関係各位に御慶びを申し上げますと共にこれまでのご尽力に感謝申し上げます。確か、センター長を拝命した6、7年前は、岐阜大学も法人化への移行期にあって、経済的な自立と理系・文系の即時的効果の期待・岐阜大学が目指すべき社会的使命・大学の意思決定がボトムアップからトップダウンへの変容に加え、学則の大幅な改正など、大学人としての意識改革を迫られると共に管理運営面においても多忙な時期でもありました。そのような中で、大学トップと留学生センターとの間には何か意思の疎通を欠くようなムードが漂っていたように記憶しております。

小生はこれまでに受け入れた多くの外国人留学生を留学生センターの教員の方々に、主に日本語・日本文化教育を中心に指導頂いておりました。彼らは、博士号を取得後、ネパール、エジプト、リビアなどに帰国し、母国の発展や国連の国際機関で大活躍しています。確かに留学生の受け入れは、経済面では必ずしも即時的効果は得られないにしても、その成果は着々と実り、諸外国との相互理解と友好を促進すると同時に、特に発展途上国の発展基盤となる人材育成に寄与して来たと自負しております。留学生政策は一つには日本の実力を世界に知らしめ、岐大生および留学生が実際に世界に出ていく人材の

育成であるので、間違いなく大学の活性化に連動していることは自明の理であります。人的交流を通じた教育環境の国際化は、国際競争力強化とも結びつくものです。センター長の仕事として最初に取り組んだのは、留学生センターにおける教育を全学教養教育の一環として位置づけることでした。大学トップの方々にも留学生教育に参画して頂き、学則の改正にこぎ着ける事が出来ました。次いで、センター教職員各位と一体になって取り組んだのは組織の部局化でした。5大部局からのご承認はスムーズに進みましたが、理事会のご了承には難儀した覚えがあります。トップが一番危惧したのは5人の専任教員の下での教授会設置の整合性にあったようです。新たな組織改革により、留学生センターが担うべき使命の明確化を図式してお示しすると共に、それに付随した魅力あるカリキュラムの内容をご理解頂く努力を重ね、約1年数ヶ月後に大学全体のご承認を得ることが出来ました。この間の留学生センター教職員各位との一体感は、濃厚かつ深遠なものであったように今も思い出されます。留学生センターを介して、多くの留学生教育に関与する機会を与えられたことは幸運でした。本学留学生センターが知的国際貢献の重要な場として、今後ともご活躍されることを祈念して拙文を取めます。



岐阜大学留学生センター設立15周年記念に寄せて

ルンド大学 日本語科 鈴木ルンドストロム和代

スウェーデン教育界で今一番ホットなニュースは、一昨日6月30日に報道されたもので、人文学分野の教育者、学習者たちには衝撃的な内容であった。

この背景には、まず「大卒専門技術者労組連合、SACO」が大卒者の「生涯収入」についての調査を行い、教師、芸術家、図書館員など人文学系の教育を受けた大卒者の就く職業が一番低いカテゴリーとしてリストアップされた。これは職業を得るまでの教育期間や求職期間が長いところに起因するらしい。

調査自体は信頼のおける方法で行われ、高く評価されている。ところが、この結果を受けて「スウェーデン実業家グループ」という一雇用者組合が独自にレポートを作成し、公表した。これが活潑なディベートを引き起こしたのである。レポートは、「全ての教育活動は、就職という形で実を結ぶべきである。したがって、就職率の低い分野を選ぶ学生たちには学生ローン額を下げるなどの処置で、志願者を抑制し他の有益な科目を選択させるべきである」と結論していた。長期求職者や失業者を大量に生み出す大学教育は、税金のムダ遣いだというわけである。

スウェーデンの教育機関はほとんどが国公立で、授業料は大学まで一貫して無料である。

ここに税金のムダ遣いと言われる最大の理由がある。しかも卒業後就職できなければ、学業中に生活費として借用した学生ローンの返済は難しく、また失業者として社会保障が働き、そこにも税金が使われることになる。

このような「スウェーデン版事業仕分け」的な、一見かなりの説得力を持つ暴論にも常に冷静に物事を総体的に見通し、忍耐力と理性で対応してきたスウェーデン国民である。今回もまず教育省がこのレポートに距離を置くという声明を出した。さらに各界識者たちの強い反論に遭い、この雇用者グループはわずか一日で、「無益と判断された人文系科目履修者には低い学生ローンを」という案を撤回した。

結果から見れば、人文系教育の無益性を指摘したため、かえって関係者に人文学的教養の必要性を再認識させることになったのである。このグループにすれば、まさに「やぶ蛇」だったわけだが、もちろん現時点ではこの雇用者組合を除いて人文学はやぶに潜む蛇とは見なされていない。しかし、この提案は人文系科目を「毒ヘビ」のごとく忌み嫌われるものに変えうる危険性を持っている。

日本語科は、人文学部に所属する小さな学科である。卒業生が日本語能力のみで就職するのは至難の技というのが現状である。従って、上記一部の雇用者グループから見れば、大学における税金のムダ遣いの存在に見えるであろう。けれども、私個人に関して言えば、このニュースを節電中の日本で聞いた時、驚きはしたがなぜだか妙に安心していった。

日本滞在中は毎日テレビにかじり付くようにして東日本大震災のその後を追った。被災地の様子や被災者の方々の日常に胸のつぶれるような思いだった。節電の暑さの中で心が暗くなっていくのはどうしようもなかった。そんな中で被災した子どもたちに笑顔が蘇っているのを見るのが大きな癒しとなっていた。子どもたちの持つ生命力は、冬の枯れ草から光り出る若芽のように、個々の胸の内にあるものも屈託のない笑顔に変えてしまうようだ。若い笑顔は体の中から湧き出てきてしまうように見える。考える先に生命が行動を起こしてしまうのだろう。この東北の子どもたちの笑顔に、ルンド大学で初級コースを終え、震災後の日本に旅立ったスウェーデン人学生たちの笑顔が重なる。

岐阜大学サマースクールに参加する17人の一年生たちだ。彼らは受講する権利を自分たちの一年間の努力と、大学側に対して屈服しない勇気で勝ち取ってきた。

ルンド大学には毎年一年次終了後の学生たちが岐阜大学のサマースクールに短期留学できるシステムが設置されている。10年前には9名だった定員も双方の合意により数年前から17名に落ち着いている。

志望者がこの定員を越える時は、3月に行われる中間試験が選考試験を兼ねることになっている。

今年は25名ほどの応募があり、秋の入学時からサマースクール参加を目指して日本語学習に努力を重ねてきていた。また、岐阜大学サマースクールは、諸々の事情で受講できない学生たちにも参加生に負けない能力を身につけようという意欲を促し、クラス全体の質の向上という相乗効果をもたらしている。新入生たちの勤勉は、我々教師陣をして頭を下げさしめるほど真摯で謙虚なものだった。

学生たちは言う、「ルンド大学日本語科にはこの岐阜大学でのサマースクールがあるから志望したんです」と。サマースクールの先輩たちは、口々に「自分がこれまで生きてきた20年という人生の中で一番楽しかった。岐阜は第二のふるさとだ」と叫び合うように伝える。これはルンド大学日本語科の伝統として語り継がれているようだ。

愛知県の豊田で生まれ、知多で育った私には、岐阜の山や川、住む人の人情は身に親しい。学生たちは作文に「いつか必ず岐阜に帰る」と書く。「岐阜に帰る」、それを初めて目にした時の感動を忘れない。一年生は先輩の「岐阜はよかった!」という言葉に、一年後その岐阜にいる自分を描く。語る者の表情やしぐさに「岐阜の思い出」が体中かけ巡っているのが見えるのだ。ここには感情を直裁に表現しないスウェーデン人には珍しい、濃縮された内なる思いの自然な発露がある。後輩はそれを感得する。「自分も岐阜へ行きたい!」と。

大震災発生一週間後、本年度サマースクール選考試験結果を発表した。8名ほど参加できない学生がいるのだ。貼り出されたりリストの前で、歓声や涙声やがっくり肩を落として「ダメだった」とつぶやく声や交錯する。通りがかった人々のげげな顔、「何があったんですか?」と問う。学生たちは、サマースクールに参加できると言って泣き、行けないと言って泣いているのだ。「そんなに日本や日本語が

好きなんですか」と再び問われる。私たち教師はただうなづくばかりだった。「日本が好き」というのも事実だが、「岐阜へ行きたい」というのが学生たちの本心なのだった。

選考発表に続いて、放射能汚染を理由に実施の決断が下せない大学側との交渉が始まった。学生たちはサマースクールという希望があったからと主張し、署名入りの嘆願書を二度まで提出して頑張った。事実、学生たちはたった7ヶ月ほどの学習で新聞記事や文学作品も読めるようになっていたし、色々な場での会話もできるようになっていた。この点に関しては、大学側も学生たちの勤勉と努力を認めていた。

4月半ばを過ぎてサマースクール実施という結論が出された。参加者たちには6月の岐阜での開校式に向けて、嬉しい日々が始まった。毎年見る光景なのだが、学生たちの光り輝くような笑顔は「希望」そのものが教室に、廊下にあふれ、躍り出しているようだった。今年のそれは与えられたものではなく、自分たちが努力して獲得してきたものなのだ。「稀有の」という形容を付けてもいいほどの笑顔、笑顔、笑顔。笑いが自然にこぼれてしまうという風だった。

私が人文学系は税金のムダ遣いというニュースを聞いても何か安心していたのは、この若い笑顔を知っていたからだ。学生たちは、これからもこの生命の根源から噴きこぼれるような笑顔を見失いそうになったら闘うだろう。さらに努力を重ねるだろう。笑顔は幸福の象徴であり、それを求めるのは前進への道なのだから。

末筆なってしまったが、ルンド大学日本語科の頑張る学生たち、それを支えてきて下さったのが岐阜、殊に郡上の皆様や岐阜大学である。ここに、その中心に位置する岐阜大学留学生センターの皆様の長年のご支援を謝し、センター設立15周年を祝したい。



岐阜大学の留学生センター設置15周年記念に寄せて

ウエストバージニア大学 外国語学部日本語科 能 亜佐子

岐阜大学とウエストバージニア大学の交流は10年以上になりますが、私が直接関わる学生交流はここ5、6年で活発になり、これからもこうした交流が続いていくことを心より願っています。

私自身は高校を卒業後、現在の勤め先であるウエストバージニア大学に学士号取得のために留学しました。交換留学という形ではありませんでしたが、留学経験を通して、日本に居たままでは気づけなかったことを沢山学びました。

最近日本の学生が海外留学に消極的な傾向があるというお話を聞きました。経済発展が低迷している状況や学費の高騰など、留学をとりまく環境が変わってきていることも影響していると思いますが、とてももったいないことだと思います。というのは、学生の時に留学の経験を積むというのは人生において、貴重な投資になることが多いからです。

留学で得られる技術（スキル）の代表が「語学力」ですが、自分で安心して使えるスキルとして身につけるまでに時間がかかるのも「語学力」です。なので、「語学力」への投資には時間が必要ですが、その勉強やトレーニングにかけられる「時間」という貴重な資源を豊富に持っているのが学生時代だと思います。趣味や遊びにこの「時間」という資源を使うのも人生の選択肢の一つだとは思いますが、30代、40代以降も頼れる一生物のスキルを身につけるために「時間」という資源を投資しておくことは賢い選択になると思います。

私は18歳の時にこの投資を始めましたが、私の従兄弟の中で、大学卒業後に就職をした会社を辞めて留学をした者が2人います。バブルの時代と違っ

て、再就職が約束されているような状況ではありませんでしたから、その従兄弟達に何故、留学に踏み切ったのか尋ねてみましたところ、以下のような返事が返ってきました。「社会人として仕事を身につけてみると、それを活かす場が海外にあることも多くて、語学力がないと昇進やポジションの選択肢の幅がかなり狭くなるのが分かったから」と。

会社としても、通訳をつけてもおつりがくるようなスポーツ選手ならいざ知らず、やはり自分で直接コミュニケーションがとれる人材の方が好ましいわけです。この従兄弟達の場合、時間だけでなくお金も投資した結果、帰国後、再就職に困りませんでしたが、「学生の時に留学をしていれば、親の経済的援助や奨学金なども含めて、もう少し経済的に楽だったと思う」と言っていました。

交換留学という制度はある程度守られた立場にしながら、留学を体験出来るとても良いシステムだと思います。このごろはスピードが随分と重視されて、「直ぐ結果に結びつかないと無駄」という考え方に支配されがちのように感じますが、学生の時に資源である「時間」を投資して、一生物のスキルを身につけるといふ考え方が必要かと思います。交換留学は半年から1年の短期間ですが、一度線路に乗ってしまえば、帰国してからもトレーニングを続ければ良いわけですし、是非、多くの学生さんがここには全部書ききれませんが、「語学力」という実利的なことだけでなく、他にも多くのことを学ぶ機会となる留学に挑戦されることを願っています。



University of Technology, Sydney (シドニー工科大学)

シドニー工科大学 守田佳子

岐阜大学とシドニー工科大学との交流は、2000年に始まりました。2000年以来、現在まで、毎年学生交換が続けられ、岐阜大学からは22人の学生がシドニー工科大学に留学し、シドニー工科大学から岐阜大学に38人の学生が1年間の留学をしています。また、両校の事務職員の交換研修も行われました。

シドニー工科大学は、工科大学という名前ですが、人文社会学部、ビジネス学部、デザイン・建築・ビルディング学部、工学IT学部、法学部、看護学部、科学学部の7学部の総合大学です。特色としては、専門教育に力点がおかれていて、たとえば、文学といっても英文学の学科でなくジャーナリズムの学科があるという大学です。

オーストラリアには40の総合大学がありますが、3大学を除いてすべて国公立大学です。シドニー工科大学も国公立の大学です。日本に比べるとオーストラリアでは大学生の数が少ないのですが、オーストラリアへの留学生は約18万人います。シドニー工科大学にも115カ国からの留学生がいます。また約3万人のシドニー工科大学の学生のうち、31%が英語を母国語としない社会背景を待つ学生です。シドニー工科大学の学生の話す言葉は、180以上になるといいます。岐阜大学に留学してきた学生たちを実際に見ていただくだけで、シドニーの多文化の一面を感じ取っていただけるのではないかと思います。

日本に留学するシドニー工科大学の学生たちは、コンバインド・ディグリーといって、卒業時に2つの学位を得ることになる学生です。日本以外の専門はさまざまで、日本専攻の授業では、これらさまざまな専門を勉強している学生たちが、一緒のクラスで勉強しています。学部を超えた学生たちの交流がここではぐくまれています。

岐阜大学からの学生の多くは、「オーストラリアの言語と文化」というプログラムを受講しています。このプログラムでは、オーストラリアの多文化主義・映画やマスメディア・希少動植物への対応などのトピックを通じて言語や文化を学んだり、アカデミック・イングリッシュを学んだり、興味のある授業を聴講しています。また2011年から3週間の短期集中コースにも岐阜大学から参加できるようになりました。このコースは、シドニー工科大学の学生との交流に力点が置かれていて、教室内だけではなく、広く社会にも出て学習するものです。

岐阜大学とシドニーのセントラル駅の前に立地するシドニー工科大学とは、かなり大学周辺の環境が違いますが、学生たちは岐阜での生活を本当に楽しんでいるようです。夏休みなどで他の町へ旅行して岐阜に戻ると、ほっとした、家に帰った気がする、といいます。留学中に岐阜が第二のふるさとなっているのでしょうか。授業だけでなく、部活動に参加し、合宿などにも積極的に参加する学生もいます。また卒業後も定期的に、岐阜を訪れている学生もいます。本当に岐阜が第二の故郷となったのでしょうか。岐阜大学からの留学生も、シドニーでのマルチカルチャーの生活を楽しみ、シドニーが新しい故郷になってくれるといいと思います。

2011年3月11日の東日本大震災のことはオーストラリアでも大きく報道されました。シドニー工科大学からの留学生も、震災地域や首都圏周辺の大学に留学することができなくなりました。日本が震災でつぶれてしまっていないことを証明するためにも、岐阜大学から多くの学生が海外に留学してくれることを願っています。



留学生センター設立15周年、おめでとうございます

エアフルト大学 仁科陽江

振り返れば、エアフルト大学が再開学し、12年前に再開講したとき、日本との提携関係を最初に結べたのが岐阜大学でした。当時すでに岐阜県とチューリッゲン州が姉妹都市関係にあり、新築の大学図書館で、岐阜の夜と題する催しが開かれ、岐阜の自然、歴史、世界遺産、名産物などが紹介されました。旧東ドイツではまだ珍しかった日本の話題ににぎわったものです。大学間の交流をめざすという提携の趣旨は当初すぐに実現され、交換留学生や在外研究の先生もお迎えすることができました。岐阜大学の先生からの口コミで、他大学の学生が留学してきたこともあります。

最初の岐大生は、教師をめざす女性で、ドイツの学校を実体験したいと、当地の基礎学校と自ら交渉し、定期的に参観していました。子供たちに好かれ、帰国の際は、ホームヴィジット先の子供たちが泣いて別れを惜しんだそうです。卒業後、岐阜県で教師としてご活躍なさっているときいています。彼女が開拓した基礎学校とのつながりは、現在までも続いており、岐阜大学の海外実習の際には毎回訪問したり、のちの交換留学生も実地調査に出かけたりしています。

留学生センター長の小林浩二先生のご引率で、総合文化海外実習と称するエクスカッションが過去6年間5回にわたり実施され、エアフルト大学において、日独合同ゼミを成功裏に行うことができました。毎回いろいろなテーマで、発表やディスカッションを行い、打ち上げパーティーに至るまで、学生同士の生の交流ができた思い出深い企画でした。

この海外実習は、参加者の方々からは、いわばプチ留学としても見られていたのでしょうか。1年間の留学にするか、10日間の海外実習に参加するか、迷ったとききました。1年間留学できなくてもせめて短期間海外へ行ってみたい、という動機もあれば、その短期間の実習がきっかけになって、オーストラリアへ1年間留学し、帰国後また2度目の海外実習に参加された方もありました。2回続けて参加

された方もありました。その都度、またひとまわり大きく成長された姿に触れるのも楽しみでした。

ドイツ側においても、人生を左右するといっても過言でないほどの影響もありました。2回目の『外国語をいかに学ぶか』というテーマの合同ゼミに参加した、当時応用言語学を専攻していたドイツ人学生は、卒業後、外国語としてのドイツ語教育の修士課程に進み、外国人にドイツ語を教える仕事につく人生設計をたてています。そのきっかけが、この合同ゼミだったそうです。4回目の合同ゼミを中心になって推進した二人は、この交流体験型日本語学習というプロジェクトを通して、話す日本語が急速に上達しました。その過程で日本留学を決め、今も日本で、日本語や異文化理解にさらに磨きをかけています。

海外実習や留学において、現地での学生との交流が最も良かったというフィードバックをたくさんいただいています。メール、ビデオ通信、SNSなどを使ってその後もコンタクトがあり、国を超えて友情が育っている事実は、よろこばしい限りです。

今年度は岐阜大学から3名の留学生を迎え、日々楽しく研鑽を積み重ねられているお姿を拝見しています。

ドイツ語を専門とされるわけではない方々が、学内のドイツ語コースに通いながらドイツ語で行われる専門科目を受講したり、発表したり、まわりの人たちと交流したりして、ドイツ語がどんどん上達している様子は目を瞠るものがあります。グローバル化イコール英語一辺倒になっている世相ですが、第二の外国語を究めることは、外国語習得全体の能力も伸ばすことになると思います。しかも、ドイツ語というゲルマン系の言語を通して、違った形で英語を理解できることもあるでしょう。隣国でさまざまな言語が話されているというヨーロッパの事情も、言語や文化の理解におおいに刺激になります。

エアフルト大学には留学生のためのいろいろな企画やプロジェクトがあり、留学生の一人一人に、国際交流オフィスのスタッフはもとより、専門科目の

教員によるメンターや学生によるチューターがつき、タンデムと呼ばれる外国語の交換学習、一般市民が親代わりになるという交流プログラムなど、私自身の留学時代とは比べ物にならないほど細やかに配慮されています。学生主体で自国を紹介する催しの一環では、岐阜大学の留学生によって日本についてのプレゼンテーションや手作りの日本料理などが提供され、会場に入りきれないぐらいの観客が集まりました。

日本人留学生の方々には、日本語クラスの公開口述試験であるプレゼンテーションにも審査員としてご参加いただき、学期末を飾っていただきました。私の担当したアジアの言語や日本事情についての授業に参加された方々もあり、ドイツ人から日本やアジアがどのように見られているかということが、留学生の方々にとってもたいへん興味深かったようです。

日本では留学生や外国人労働者が急激に増加している昨今ですが、自分自身が外国で暮らしてみると、彼らの気持ちも身に染みて理解できるのではないかと思います。

大震災のときには、ここエアフルトでも、日本人

は皆、まわりの人たちから心温まる励ましを受けました。我々日本人の家族や友人の身が案じられ、義捐金も集まり、自分たちに何ができるか話し合うドイツ人たちの姿に、世界の気持ちがひとつになっているのを痛感しました。

原発事故の影響で、外国人が日本を避けている状況もあるようですが、海外のメディアや風評などには根拠のないものもあると思います。そういうときこそ、草の根における国際間のコミュニケーションが重要だと考えます。

先入観や偏見、固定観念やうわさなどをふきとばすべく、日本の若者が国際的に視野を広げ、自ら世界に向けて発信していかれますように、エールを送ります。学生時代の留学経験は、その人自身のその後の人生ばかりでなく、世界の未来にとってかけがえのないものになると確信しています。

岐阜大学と交流が始まってから12年間、若いパワーにあふれた方々をエアフルトにお迎えするたびに、日本の明るい展望を信じる気持ちがいつそう強くなります。

岐阜大学の皆様、いつでもエアフルトへお越しください。お待ちしております。



岐阜大学での一年間を回顧する

木浦大学校 アジア文化研究所長 教授 朴 賛 基

岐阜大学留学生センター設置15周年おめでとうございます。

木浦大学校と岐阜大学が2008年2月26日に学術交流協定を結んで以来、比較的短い間に学生交流、教員交流、学術情報の交換等の有益な関係を築いてきた。

ことに、2010年4月30日と同年12月3日、木浦大学アジア文化研究所主催の「日本文学の心象空間としての温泉文化」、「東ヨーロッパと日本文化の比較研究」というテーマで開催された2回の国際シンポジウムでは、岐阜大学から5人の先生（4月は林正子副学長、12月は小林浩二留学生センター長、森田晃一教授、吉成祐子准教授、粥川美重子さん）が参加され、活発な発表及び討議を行う等相互の学術交流に大きく寄与したと思う。

私は両大学の学術交流協定書の草案を作成、検討する作業に携わり、また協定を締結する場に立ち会ったこともあり、木浦大学側の窓口の役割を担ってきている。それをきっかけに、具体的な交流促進のためにも一定期間岐阜大学を訪問すべき必要性を感じ、研究活動も兼ねた目的で、2009年2月25日から翌年2月24日までの1年間、岐阜大学国際交流会館に滞在したことがある。

岐阜大学滞在中には主に研究と国際交流についての活動に尽力した。まず、研究活動について顧る。私は日本近世文学を専攻しており、そのうち「江戸時代の朝鮮通信使と日本近世文学」について関心をもって調査してきた。2009年の岐阜大学訪問のおり

には、「江戸時代の異文化交流と日本文学」、「朝鮮通信使と美濃路」、「江戸時代の温泉文化」という3つの課題を抱えており、研究活動を行った。

訪問期間中に行った研究発表について簡単に整理すると以下の表の如くである。

さらに、滞在中には朝鮮通信使が通った美濃路を辿ってみたり、温泉旅行をしながら、岐阜の地域文化にも積極的に接しようと努力した。特に、岐阜県歴史教育者協議会、岐阜県ユネスコ協会に招かれて話をする機会を得たことは何よりの成果である。

これは偏に岐阜大学留学生センターの小林先生をはじめ、諸先生の配慮によるものであり、深く感謝申上げる。

これからも、相互の交換留学生の派遣、サマースクールに参加、教員の学術交流を通して教育、研究、地域社会との連携等多方面においての情報交換がより活発に行われ、相互の発展に大きく貢献することを期待する。



2010年1月27日（水）岐阜大学留学生センター講演会の様子

日 時	題 名	主 催	場 所
2009.08.17	『女四書芸文図会』の研究	日本近世文学『叢』の会	東京学芸大学
2009.10.08	江戸時代の朝鮮通信使と日本文学	九州産業大学	九州産業大学
2009.10.17	朝鮮通信使と日本歴史小説	日本大学	日本大学
2010.01.05	朝鮮通信使と日本文学	岐阜県歴史教育者協議会	岐阜市柳ヶ瀬
2010.01.27	江戸時代の異文化交流と日本文学	岐阜大学留学生センター	岐阜大学



思い出すこと

岐阜大学留学生センター非常勤講師 岐阜経済大学経営学部准教授 加藤 由紀子

「留学生センター設置15周年」と聞いて、出て来た言葉は、「えっ！もうそんなになるの!？」という何とも平凡なものでした。これでは日本語教師の表現力が問われるとは思わぬものの、やはりその一言が正直な気持ちです。よくよく考えてみると、私の人生は岐阜大学の留学生に対する日本語教育の歩みと重なると言っても過言ではありません。その岐阜大学の歴史について、私の関わったところの一部を、思い出として書いてみたいと思います。

30年ほど前まで、東海地方の大学は、留学生に対する日本語教育を名古屋大学で半年してもらった後、各大学で留学生を引き受け、専門の研究をさせていました。しかし、それでは留学生、特に短期の留学生の場合は、岐阜大学での研究が中途半端になり、こちらでの生活に馴染めないうちに帰国することになってしまうという問題がありました。そこで、来日後すぐに岐阜大学で留学生を受け入れる方法が考えられました。これが、岐阜大学の国際交流室の始まりであり、日本語教育の始まりでした。当初の日本語の授業は、日本語教師もボランティアで、国際交流に興味がある人が手探りで行っていました。やがて数名の非常勤講師を中心に日本語の授業構成が考えられるようになっていきました。と言っても、その頃は日本語教育の方法自体が今のようには確立されておらず、非常勤講師もボランティア教師もその経験が十分とは言えなかったもので、教育学部国語科の工藤力男先生に日本語の文法を教わり、英語科の藤掛庄一先生に教授法を教わりながら日本語指導をしていました。今から考えると、この時の私の教え方は間違いなくひどいものだったと思いますが、教育に対する限りない情熱を持っていたことは確かです。この時ほど夢中になり必死になって学んでいた時期はないように思います。そのためか、その時の思い出は尽きるところを知りません。

この時、国際交流室の事務スタッフは有給でしたが薄給で、今から考えると限りなくボランティアの部分が多かったと思います。しかし、そうだったか

らこそ、事務スタッフも日本語教師も自分たちがよいと思うこと、やりたいことを自由にさせてもらっていたように思います。また、国際交流室で日本語を学んでいた最初のころの学生数は10名程度でしたので、留学生を自宅に招いたり、留学生が開くホームパーティーに行ったりして、個人的にも非常に親しくしていました。おかげで、その時の学生の何人かとは今も親しくしています。このような環境の中、サマースクールも実施されるようになりました。初めは、アラスカ大学フェアバンクス校、続いてスウェーデン・ルンド大学の受け入れをするようになり、ルンド大学のサマースクールは現在も続いています。さて、その時には、アラスカ大学の学生もルンド大学の学生も泊まる所がなかったので、大学関係者の家に無償でホームステイさせていただき、そのホストファミリーの方々から日本語の授業のために学生を毎日大学まで送り迎えしてくださっていました。また、このサマースクールで実施した小旅行（日本語の授業に出ている留学生も加わりました）も、岐阜大学の先生方のお世話で行われ、事務スタッフや日本語教師も車や旅費持ち出しで参加していました。当時は自分も学生の年齢に今よりずっと近かったからか、旅行やパーティーの時は、学生と一緒に楽しんでいました。

国際交流室は本部の建物1階の北東角にある小さいものでしたが、15年前に、常勤の日本語教師と独立した事務所を持つ留学生センターとして新たにスタートすることになりました。その時、これからは留学生の研究や生活が整備されると心から喜んだものです。事実、日本語教育も留学生の生活に対するサポートも見見るうちに整っていき、年々着実によりよいものになっていきました。留学生数も徐々に増え、最近では350人程度の学生がいつも岐阜大学にいます。これだけの規模になり、しかも留学生がスムーズに大学や大学院での研究を進められるのは、留学生センターがうまく機能しているからだだと思います。しかし、今では、留学生の

ほとんどを知らない状態になってしまいました。このことを個人的には少し寂しく感じたりもしますが、多文化共生の時代へと進んでいく中で、岐阜大学と留学生センターの果たす役割はさらに重要になっていくと思います。

岐阜大学でボランティア日本語教師としてスタートした私が、日本語教育を生涯の仕事にして、今も日本語を楽しく教えていただけるのは、国際交流室と共に歩いてきた日々があるからだと思います。あの

時に学生と交わした会話、授業の中での失敗の数々、学生との温泉旅行やヨットツアー、一緒に作って食べたお料理…、その時の状況だけでなく、学生の表情や声まで思い出すことがあるのですから不思議です。そして、今も留学生センターで週に数コマ教えていただけることを本当に幸せに思います。

最後になりましたが、今後の留学生センターの更なるご発展を心よりお祈り申し上げたいと思います。



岐阜大学留学生センター設立15周年おめでとう,そして,感謝

学校法人研伸学園事務局長

愛知さわみ看護短期大学学長補佐

森 山 章

(元岐阜大学学生部学生課国際交流事務室長)

岐阜大学留学生センター設立15周年,おめでとうございます。

平成6年4月1日(金),私は留学生課設置に向けての組織「学生課国際交流事務室」の室長として,2度目の国際交流担当の辞令を頂いた。この8年前に,岐阜大学に初めて留学生係ができ,係長として3年間勤めさせて頂いてから5年ぶりの国際交流関係の業務となった。

しかし,この辞令こそ,私のその後の人生にとって,大きな転機となった。このことについては,後で述べますが,大学が,大きなサイコロを転がし,それまでとは違った歯車が回り始めたと言っても過言ではない。(私は当然ですが,友人もそのように言っています。)

事務室は,旧短大ホールをリフォームしたもので,現在のセンターに比べると本当に貧弱で,日曜大工での改築といったところでした。それでも工短卒の私にとっては,母校の建物の利活用と,満更ではなかった。事務室では,国際交流に関すること及び留学生に関すること全てを7人のスタッフで担当していたわけですので,今考えるとよくやってきたなと思います。

当時,留学生は約200人,学術交流協定を締結している大学は,ブラジル・中国・アメリカ・スウェーデン・韓国・フィリピンの6カ国12大学であり,アメリカ・スウェーデンからの留学生を迎えて,8週間・3週間のサマースクールを実施していた。また,送り出しでは,浙江大学(中国),ノーザン・ケンタッキー大学(アメリカ),ルンド大学(スウェーデン)へのサマースクールも実施していた。また,学術交流も益々盛んになっていき,新たな学術交流協定締結の資料作りや国際交流に関する奨学資金確保のため,岐阜市内,各務原市,大垣市など県内の優秀企業へのお願い。それに,地域の各

種団体との留学生交流のお手伝いなどの日常業務だけでも結構ハードだったと思います。

そこに,この事務室の設置課題である,「留学生課」,「留学生センター」の設置に係る概算要求関係の資料づくりに明け暮れ,女性スタッフは時には涙し,男性スタッフの私と葛谷留学生係長(現医学部附属病院医療サービス課課長補佐)は平日の殆んど毎日が深夜0時を過ぎての帰宅となっていた。特に,平成7年春からの「留学生課」,「留学生センター」の設置に係る概算要求関係の資料作成の時などは,必死であった。ライバル大学も多く,留学生数の伸びも思うように行かず,200人を超えるかどうかの堺を彷徨っていた。そんな時,私たちに勇気を与えてくれたのは,留学生の笑み,国際交流クラブの学生の活動,そして,折につれ,遠い事務局からわざわざ訪ねて頂いた近藤昌彦事務局長でした。このことは,あまり知られていないと思いますが,何かにつけて顔を覗かせて頂き,激励していただいたことは,今も忘れません。感謝しております。そして,国際交流に携わる先生方や概算要求を担当としていた事務局の方々のご努力により,ライバル校を蹴散らし,設置が決まったときには,私たちも小躍りして喜んだものでした。

設置が決まった後,葛谷係長はじめ殆んどのスタッフは設置された留学生課への異動となったが,私については,近藤事務局長が,新しく研究所を岐阜県土岐市に建設中の核融合科学研究所の研究協力課課長補佐に推薦して頂き,一旦,岐阜大学を離れることとなりました。前述の大学により転がしていただいたサイコロの始まりでした。3年間名古屋大学構内にあった研究所の土岐市への移転や新施設での研究の開始等を学ばせて頂き,岐阜大学医学部学務課課長補佐に戻ってき,農学部,医学系研究科・医学部の事務長として素晴らしい仕事をさせていただき18年3月無事定年退職し,引き続き一宮市の大

雄会病院を経て、現在の大学で勤務させて頂いている。民間の国際交流関係でも、この事務室に移ったときに岐阜日伯協会の事務局長となり、現在副会長としてブラジルとの友好交流の仕事をし、この協会をベースに、岐阜県国際交流団体協議会(G・I・A)の理事長・副会長を、また、岐阜市国際交流協会の評議員をライフワークとして携わらせて頂いている。更に、平成18年から岐阜家庭裁判所の家事調停委員を拝命し、社会活動をしている。定年後のこの充実した忙しさを楽しむゆとりは「留学生課」、「留

学生センター」立ち上げに携わったことが礎となっている。

我が国の国際競争力が、当時に比べその順位を下げていることなどから、今こそ留学生センターの果たさなければならない課題は大きいと考えます。現状での活動をホームページ等で拝見すると素晴らしいものがありますが、この15年を一つの節目として更に発展されますことを心よりお祈りしております。また、私を育てていただいたこと、本当にありがとうございました。そして感謝申し上げます。



留学生センターの発展を願って

前岐阜大学学務部留学生課長 眞野 初 (平成22年3月退職)

岐阜大学留学生センター設置15周年まことにおめでとうございます。平成20年4月1日に岐阜大学学務部留学生課長として赴任して以来、平成21年4月30日までは同課長として、5月1日からは学務部学生支援課長に配置換と同時に学術情報部国際企画課留学生支援室長に併任となり、8月1日に併任解除となりました。その間、留学生センター長の小林先生はじめ諸先生方の御協力のもと、留学生関係業務に携わることができましたことを懐かしく思い出すとともにあらためて深く感謝しております。

国際企画課ができたのは、岐阜大学の国際化の一層の進展をはかるため、時の政府の留学生30万人受け入れ計画に呼応して事務組織を改編したわけですが、残念ながら政権の交代に伴う事業仕訳等の影響もあるのか、最近ではこの計画もマスコミ等で話題になることも少なくなりました。

しかし、このような時こそ岐阜大学にとってはかえって良い機会と思われれます。従来から留学生の受け入れに積極的取り組み、成果を上げていることは大いに評価されるどころです。他の国立大学と比較しても、その留学生数、留学生支援の内容、留学生センターの業務内容等いずれも優れた実績を持っています。また、留学生に対する地元黒野地区はじめ岐阜県民の方々の御理解、御協力についても素晴らしいものがあります。経済的支援をお願いするため県内の企業にお伺いする機会がありましたが、岐阜県の方々の本学に対する信頼は絶大なものがあることを強く感じた次第です。例えば留学生の就職についても、イスラム圏の学生を採用し、勤務中の礼拝を認めるなど積極的に協力している企業もあります。サマースクールについても地元の方々の熱心な協力があればこそと思います。本学に協力するというより、本学と一緒に留学生を受け入れるという非常に積極的な方針がうかがわれます。地域の

国際化、活性化のために本学がサマースクールを実施しているのではないかとと思われるほどで、本学の目標である地域貢献に大いに資しているものと思います。ここまでサマースクールを戦略的に実施している国立大学は少ないのではないのでしょうか。経費の点においてもサマースクールにかかる授業料収入をしっかりと確保し、大学負担を少なくして事業をおこなっていることは法人化の折、特に注目に値します。大学評価を意識してサマースクールやインタースクールを実施している他大学の話を聞くと、その採算性には雲泥の差があるようです。今更ながらサマースクールを始めた関係者の方々の先見の明に感服します。

そのほかにも本学には留学生教育についての素晴らしい取り組みがあります。評価のためのパフォーマンスなどに精力を割くことなく、今後も自信をもって地道に取り組むことが何より一番大切だと思います。平成20年に国際交流委員会の主催により各学部の留学生教育を担当されている先生方から留学生の受入・指導等について現状と問題点、要望事項等、具体的な報告がなされたこと記憶しております。今後もそのような機会を生かして留学生事業の企画、改善・充実を目指すことも一つの有効な手段ではないかと思われれます。幸い岐阜大学創立60周年記念募金には留学生への支援も含まれているということです。今後は安定した財源により一層の事業の展開が可能になるものと期待されます。

さらに、教室確保に困難を来すなど、長年にわたり留学生業務を遂行する上で切実な事態となっている狭隘な施設を改善するため、新センター棟の建設が関係者の皆様の御尽力により1日も早く実現し、留学生センターの憲章、基本戦略の着実な遂行により、留学生センターにおける教育研究がますます発展することを強く願っております。

帰国留学生(留学生センター所属留学生)からのメッセージ

岐阜大学の思い出

第5期日本語・日本文化研修留学生 バガダエワ・アネリ
(カザフスタン, カザフ民族大学)

はじめまして、カザフスタン出身の留学生、バガダエワ・アネリと申します。2005年10月～2006年9月までの1年間、岐阜大学留学生センターで日本語・日本文化研修コースに参加する機会をいただきました。

初めての留学でしたが、皆さんのおかげで1年間はとても充実していました。先生方やセンターのスタッフの方々、国際交流会館の管理人、松岡さんに大変お世話になりました。皆様にはとても感謝しております。

来て間もない間、授業が始まり、外国人の友達はもちろん、日本人の学生たちとも仲良くなりました。留学生だけで孤立するというような状態は起こりやすいですが、センターでは日本人学生と留学生と一緒に参加する「異文化コミュニケーション」という太田先生の授業がありました。そして、大学のサークルにも外国人との交流に積極的な学生たちもいて、とても楽しかったです。個人的にも気に入ったサークルを選択できるので、日本人学生と同じような学生生活を送ることができます。たとえば、私は茶道部に入部して、帰国するまでお稽古に参加するようにしていました。現在、2度目の留学をしていますが、茶道の練習を続けたくて、広島大学でも茶道部に入部させていただいて、毎週お稽古に参加しています。

日本文化を深く味わえるための様々な体験もできました。春には森田先生と歌舞伎を見に行き、夏には岐阜の長良川の近くにあるホテルで能を見て、役者さんと直接にお話もできて、普段はなかなかできない体験をさせていただいたんだなあ、今になって分かりました。名古屋で行われた相撲の本場所を見に行ったり、多治見市で陶芸を体験したり、長良川の鵜飼も見に行きました。以前全く興味が無かった相撲は実はとても面白くて、はまりやすい国技だということに気づきました。陶芸体験でできたお茶碗は今でも大切にカザフスタンのアパートに飾ってあります。そして全国的に有名な長良川の鵜飼も日が暮れた後で行われるので、とても印象深く、機会があればまた見に行きたいと思います。岐阜の美術館を見学したときに浮世絵を見て、さらに自分たちで版画を刷る体験もできました。国際交流会館では12月に餅つき大会にも参加して、地域の皆さまとも交流できて、作りたてのお餅とお雑煮をたくさん食べました。

日本語の授業はとても印象に残っています。橋本先生の口頭表現の授業を受けて、日本語で話すことを恥ずかしがっていた自分は少しずつ変わることができたと思います。今まで、話す前に頭の中でたくさん考えて、文法の間違いが無いようにと心配していました。多くの留学生は私と同じで、日本語で自分の意見を表すことはなかなかしなかったです。しかし、授業では橋本先生に留学生は「間違いをしないと日本語も上達しない」と言われました。日本人ではないので、日本語で完璧に話すことをしなくて良い、そして、私たちは自分が考えていることをちゃんと口に出して、間違いがあったほうが良いということがわかりました。やはり、失敗は成功の元ということばの通りです。今でもその話を、日本語を習っている後輩たちに教えています。

土谷先生の授業では作文やレポートを提出して、先生が訂正した文法の間違いや良かった点などをクラスのみみんなで分析して、とても良い勉強になりました。そして、外国語で文章を書くことは貴重な訓練になりました。このような練習によって徐々に新しい語彙が身について、文法の間違いも少なくなったと思います。

半年過ぎて、4月に入ったら研修の成果として小論文を仕上げるという課題がありました。この小論文のおかげで自分の日本語はもっと上達できたと確信しています。みんなそれぞれ興味のあるテーマを考え、指導担当の先生と相談しながら小論文のタイトルを決めて、資料収集を始めました。私とピムチャン(タイの

留学生)は土谷先生のもとで文学に関係のある研究を進めていました。初めての「大きな」小論文だったので、自分には本当にできるのかなという自信の無い考えでいっぱいでした。しかし、先生のおかげで自分が考えている研究の方向や調べるべき点などがはっきりとなっていて、徐々に論文が出来上がっていました。8月という猛暑の時期に、体が燃える・パソコンが燃える・自分の頭も燃える、そして論文のまとめのところも燃えるような想いで、日研生みんながやっと作品(論文)を完成させました!本当にほっとした信じられない気分は今でも忘れられません。有意義なことをしたというような実感がわいてきて、達成感に満ちていました。

帰国した後、小論文の指導担当の先生、土谷先生と連絡をとっています。時々メールで近況を知らせています。そして日本語の勉強や小論文のテーマでたくさんアドバイスをさせていただいた加藤先生とも連絡をとっていて、国際交流会館の松岡さんにもメールで近況を知らせています。2回目の留学、広島に来たのは2008年の春でしたが、去年、2010年のゴールデンウィークにやっと会いに行きました。皆さんはとてもあたたかく歓迎していただいて、久しぶりに話ができて、とても嬉しかったです。また時間があるときに岐阜に会いに行きたいと思います。

留学の思い出

第6期日本語・日本文化研修留学生 ペーテル・ジョンソン
(スウェーデン、ルンド大学)

日本のこと、岐大での留学、日本の生活などのことは、毎週、いや、もしかしたら毎日少し考えています。それは決して言い過ぎではないと思います。

自分が生きてきた28年間の経験や行動を考えると、岐大での一年間は一番自分の人生を変えたのです。他の国で生活して、日研生として日本の様々な文化的な部分の経験できて、世界中の留学生と交流して、今でもメールしたり話したりしている友達ができて、日本人と一緒に講義を受けて、恋を見つけて等々、自分ももっと書きたいのですが、おそらく終わらないと思うので、この辺で切っておきます。

無論(好きな言葉です)、留学生センターの素敵な先生達とスタッフの皆さんに改めてお礼を申し上げたいと思います!岐大での留学は一期一会でした。心から、ありがとうございました!

岐阜大学での思い出

第7期日本語・日本文化研修留学生 宋 曉 煜
(中国、広西大学)

2007年10月2日、私は岐阜大学の国際交流会館に着きました。世界各国の飾り物で飾られた華やかなロビー、設備の整っている広いキッチン、ユニットバス付きの1人部屋などを見て、私はすぐ会館が好きになり、私の留学生活もその会館から始まりました。

1年間の留学生活は想像したよりおもしろかったです。教室で先生方が親切にしてくださって、会館で管理員の松岡さんはいつもお茶とお菓子に招待してくださいました。そして、留学生センターや事務の皆様がイベントや防災訓練などの準備をしたり、旅行やお祭りなどの企画を作ってくださいたり、自転車を貸してくださいたりしたおかげで、私たちは豊富多彩な留学生活を送るようになり、ほかの留学生たちと一緒に、いい思い出をたくさん作りました。

日本の皆様のおかげで、私は少しずつ成長していました。帰国してからもう3年間経ちましたが、岐阜大学での思い出はいまでも目の前に鮮やかに浮かんでいます。

岐阜大学留学生センターの創立15周年、おめでとうございます！

世界への一歩

第9期日本語・日本文化研修留学生 丁 允 智
(韓国, 木浦大学)

はじめまして。私は岐大の日本語・日本文化研修留学生9期だった丁允智と申します。

まず、岐大留学生センター設立15年を心よりお祝いします。このように文章を書かせていただいて非常に光栄だと思っています。

私にとって岐大で生活した1年は世界に向かう一歩でした。広い世界に向かって小さな一歩を踏み出そうと外国語である日本語を専門にしました。そして岐大の交換学生になり、多様な文化を経験することができました。岐大が外国から来た留学生たちのために気をつけてくださったことをありがたく思っています。

例えば、同じ年齢の日本人の友だちと自然に付き合うことができた授業や、茶道、歌舞伎、能、相撲など日本の伝統文化体験が挙げられます。計画をたてて半年かけて書いた小論文は、自分の不十分な日本語の実力を向上させてくれました。また、岐大の留学生の寮(国際交流会館)に暮しながら、日本人だけではなく、世界各国の友だちと付き合うことができました。その他にもいい思い出がたくさんあります。

この経験によって、新しいことや自分と違うことに対する柔軟な思考が発展し、他人を認め、自分自身も発展させることができるようになりました。

岐大で過ごした1年は私にとって宝物みたいに大切な経験です。このような機会をくださった岐大の方々や留学生たちを誠心誠意に指導してくださった先生に重ねてお礼申し上げます。今後とも岐大の留学生センターがより一層発展するよう、心からお祈りします。

一生ものの機会

第7期日本社会文化プログラム留学生 ホリー・マッケナ
(オーストラリア, シドニー工科大学)

私は2010年4月から2011年2月にかけて岐阜大学に留学しました。その間、私は留学生センターの日本社会文化プログラムの学生で、日本語のAとBクラスを勉強していました。

その10ヶ月は今までの中で一番すばらしい経験だと思います。岐阜大学のプログラムのおかげで、様々な国の友達が出来たし、日本語が分かるようになったし、日本文化を経験することも出来たし、オーストラリアと日本の違う点もはっきり分かりました。日本社会文化プログラムで茶道、蕎麦、ホームステイ、登山などのチャンスがありました。そして、岐阜大学の授業は本当に良かったと思います。読み書きだけでなく、話す練習のチャンスもよくありました。その結果、留学生は日本語が速く上手になって、理解できるようになります。

岐阜大学にいる間に様々な経験をしました。大学のクラブやサークルがあるので、留学ラブというクラブに入って、日本人の友達がたくさん出来たり、色々なイベントがありました。例えばパーティーをしたり、岐大祭のために神輿を作ったり、カラオケをしたりしました。さらに、国際交流会館に住んでいて、そこで

もイベントを行いました。ウェルカム・パーティー、七夕、餅つき大会など行いました。日本文化なので、外国人にとって珍しく、面白かったです。そして、他の留学生と一緒に住んでいるので様々な国の友達が出来ただけではなく、他の文化も少し学べました。

このプログラムのおかげで帰国しても、日本語を勉強し続けられて、7月に日本語能力試験を受けました。将来にはもっと高いレベルを受けるつもりです。実は先生にこの原稿を書くようお願いされたとき、私は4ヶ月前に帰国したのに、日本にまた戻ってきました。それほど日本に戻りたかったです。

私はまだぺらぺらではありませんが、この留学の経験を活かして一人でも頑張りたいです。日本の文化や言語ばかりではなく、国際関係なら何でも勉強したいです。そして、将来は絶対に日本語に関する仕事をしたいと思います。

このプログラムは本当に一生ものの機会だと思います。

岐阜大学の日本語と日本文化プログラム

第8期日本社会文化プログラム留学生 バド・ルイス
(アメリカ、ウエストバージニア大学)

私は2010年の10月に岐阜大学へ来ました。すぐ日本語の授業が始まりました。最初のころ、私の日本での生活は難しかったです。日本語はあまり上手じゃなかったし、留学生センターの授業は日本語しか話さない授業なので、本当に大変でした。でも、岐阜大学の留学生センターの方たちと先生たちのおかげでだんだん大丈夫になりました。今、大変ありがたい気持ちでいっぱいです。

授業は私にとってちょうどよかったと思います。難しすぎるわけではないし、簡単すぎるわけでもありませんでした。たくさんいろいろな事を勉強しました。

ただし、聞くことは僕にとってとても難しかったです。実は出来ないと思っていましたが、橋本先生と話をしたおかげでもう一度頑張ろうと思いました。そして今は聞くことに自信があります。岐阜大学の先生たちは皆そんな人だと思います。つまり、先生は皆親切で、学生の事をとても気にしてくれます。もし私のような問題があったら、聞いてくれます。だから、ウエストバージニア大学の他の学生に、留学するなら岐阜大学へ留学することを勧めるつもりです。

もし留学生センターの方々と先生たちが居なかったら、僕の日本での生活はもっと大変だったと思います。

日本語・日本文化研修留学生



(第5期留学生)



(第6期留学生)



(第7期留学生)



(第9期留学生)

日本社会文化プログラム留学生



(第7期留学生)



(第8期留学生)

留学経験者からのメッセージ



留学生センター設立15周年にあたって

奥村 明日香

(教育学部2005年卒業 留学先 ブラジル、カンピーナス大学)

岐阜大学留学生センター設立15周年、おめでとうございます。

設立15周年というお話を伺い、私自身ここまでの道のりを振り返ってみると、本当に多くの経験を留学生センターでさせていただいたように思います。岐阜大学に入学した頃は留学生センターという施設があることも知らず、通りかかって“留学”という言葉に気に留めても、その頃の私には、センターの扉を開ける勇気はありませんでした。しかし、RyugakuLoveというサークルに所属し、サークルの顧問をしてくださっていた太田先生と出会わせていただいたことや、サマースクールという短期留学があることを知ったことがきっかけとなって、初めて留学生センターの中に入らせていただいた時は、ここで何かが始まりそうな、不思議な感覚に陥りました。

そしてその時から私が大学を卒業するまでの4年間、アメリカへのサマースクールに始まり、留学生との日本語授業、サークル活動、サマースクールチューター、ブラジルへの交換留学と、私の大学生活の経験全てにおいて留学生センターは私の拠点となっていたと思います。

特に、私がブラジルの大学へ交換留学を希望してから飛び立つまでの期間は、留学生課の方々がブラジルの大学と様々なやりとりや手続きをしてくださいました。ブラジルへの交換留学そのものが珍しく、過去の情報もほとんどない、さらに大学に連絡をしてもいっこうに返事が来ないという状況の中で、それでも私が心を強く保っていたのは、留学生課の方が常に親身に、そして頻繁に私に連絡をしてくださっていたからです。入学許可証のことや住む場所、空港への出迎えの件など、出発のギリギリまで現地から連絡が来ずわからない状態で、そん

なところへ留学に行っても大丈夫だろうかと不安にもなりましたが、この留学は私一人のものではなく、岐阜大学から自分が代表して行くのだから、今まで私のために手続きを進めてくださった、応援をしてくださったセンターのみなさんに喜んでもらえるよう、いい結果を残そうと決意し、出発しました。

1年の留学中も色々なことがありました。でも、いつも私を心配してメールをくださいました。また、私も元気な姿が見せられるよう、報告書を通して、様々な思いをお伝えすることができました。この留学で私がここまで強い使命感を持てたのも、私を支えてくださったセンターの方々に恩返しをしたいという気持ちがあったからだと思います。

私は今、岐阜市にある日本語学校で日本語教師をしています。私が最終的にこの職業に就いたのも、留学生センターとの出会いがなければあり得ません。太田先生にお会いし、センターで開かれていた留学生の日本語の授業に初めて参加させていただいたのは確か2年生の頃だったと思いますが、センター内の教室で、色々な国の学生と一緒に日本語で話したり、タスクをしたりしていくという経験は、何か新しい風が吹いたような、そんなワクワクした気持ちでした。日本語の教え方なんていい加減だだと思いましたが、お互い電子辞書を片手に、絵を描いてみたりジェスチャーを試みたりしながら意思疎通を図り、その経験を通して日本語教師という職業に興味を持ち始めたことが、今の私につながっています。

私は、大学生活の中で多くの留学生に出会い、交流の場を持つことができました。様々な目標を持って留学に来た人々から刺激をもらい、向上し合い、時間を共有することができました。そしてブラジルで“留学生”になり、多くの人に支えてもらいまし

た。留学生センターから、視野が幅広く広がりました。

そして、今度は私が留学生を送り出す側になりました。大学で夢を現実へと近づけられるよう、日本語能力を身につけさせることが私の任務です。私が大学生の時に留学生センターを通して出会った留学生の多くは、日本を愛し、日本で仕事をしています。それが答えの全てです。いつか私が教えている学生が岐阜大学で学生生活を送れる日をイメージしながら、日々努力していきたいと思っています。

最後にりましたが、留学生センター、ならびにセンターにいらっしゃいます先生方や留学生課^(注)の方々の今後ますますのご活躍をお祈りしております。

(注) 学務部留学生課は2009年5月から、学術情報部(現在は学術国際部)国際企画課留学生支援室となった。



岐阜から世界へ

杉山 真央

(応用生物科学部2009年卒業 留学先 スウェーデン、ルンド大学)

このたびは、留学生センター設置15周年、おめでとうございます。

私は平成16年に岐阜大学に入学してから卒業する平成21年までの5年間、サマースクール(受入)チューター3回、ルンド大学(スウェーデン)への交換留学1年、ソウル産業大学(韓国)^(注)へサマースクール(派遣)3週間、そして国際交流サークル「RyugakuLove」での国際交流活動など、様々な場面で留学生センターのお世話になりました。日本人学生の中で私ほど留学生センターに通い、お世話になった人はいないのではないかと思うほど、学生生活を留学生センターと共に送らせていただきました。さらにはこのように記念誌に執筆までさせていただきました。大変光栄に思います。

私は学生時代に、交換留学でスウェーデンに、短期留学で韓国に、2度留学をさせていただきましたが、どちらも岐阜大学が開催しているサマースクールにチューターとして参加したことがきっかけでした。

サマースクールチューターの主な役割は、サマースクール留学生の宿舎である学外研修施設で留学生と共に生活をし、日本での生活のサポートをするというものです。私がチューターをしていた当時は、8週間コースにスウェーデンのルンド大学の学生が約20名、3週間コースに韓国のソウル産業大学の学生が約5名参加していました。2か月間、一緒に食事をしたり、宿題をしたり、遊んだり、お酒を飲んだりする中で、かけがえのない思い出と友情が生ま

れました。私は、サマースクールを通じてスウェーデンという国、人に触れていく中で、スウェーデンのことをもっと知りたいと思うようになりました。

私は、大学に入学する前から留学をしたいと思っていました。しかし、留学先を決めるにあたり、締め切り直前までアメリカに行くか、スウェーデンに行くか悩みました。英語と専門分野を学びたいという気持ちがあったため、サマースクールが無かったら迷わずアメリカを選んでいたと思います。しかし、スウェーデンへの熱い思いが勝り、英語は独学すると自分自身に誓い、ルンド大学へ留学することを決めました。留学中は前期にスウェーデン文化を中心とした留学生向けのコースを受講し、後期には英語で開催されている専門の食品科学の授業を現地の学生に交じって受講しました。分かってはいましたが、やはり英語で授業を受け、単位を取るの



簡単なことではありませんでした。そもそも私は留学直前の英語のテストで再試験を受けるほど、英語が苦手だったので、あの語学力で最初から授業に参加し、課題をこなすなんて、今思うと勇気があったなと我ながら感心します。課題も一人で本を読んで調べて提出して済むような優しい物はほとんどなく、グループワークでディスカッション&プレゼンテーションがほとんど。専門の授業では、ディスカッションで発言した時間と内容が評価されるというものもありました。たくさんの恥をかき、人に迷惑をかけながらも、親切な友人達に助けられてなんとか乗り越えることができました。

留学中は、サマースクール留学生が逆に私のチューターとなり、課題を手伝ってくれたり、パーティーや旅行に連れ出してくれたりして、私の留学生生活をより充実したものにしてくれました。ほとんどの現地学生が実家に帰る長期休暇には、実家に招待してくれ、ホームステイをさせていただきだけでなく、北欧の少数民族であるサーミ人の家庭に連れて行ってもらったり、オーロラを見に連れて行ってもらったりと、貴重な経験をたくさんさせてもらいました。日本とスウェーデンでお互い助け合った友人は、今でも、これからもずっと大切な友人です。

今思い返すと、留学をしていた1年間は、夢のようで、現実離れしすぎていて、自分自身、本当にあったのか、信じられなくなることがたまにあります。

すべては、大学1年生の春、サマースクールチュー



ターの説明会に参加したことから始まりました。あの日説明会に参加していなかったら、今の私はなかったことでしょう。

社会人になり、休みがなかなか取れない中で、学生時代に満喫した学生生活を送れたこと、世界中に友達ができたことは、今の私の支えになっています。是非とも岐阜大学の後輩達にも、岐阜大学の支援を最大限に活用していただき、留学や国際交流の経験を重ねて頂きたいと思います。

末筆ではございますが、私が留学生センターの皆様にしていただいた数えきれない支援に心より感謝の意を表するとともに、貴センターの今後ますますのご発展を心よりお祈りいたします。

(注) ソウル産業大学は、平成22年9月から「ソウル科学技術大学」に改称された。



留学生生活を振り返って

塩澤直人

(教育学部4年 留学先 アメリカ、サンディエゴ州立大学)

私は教育学部英語教育講座に在籍し、英語教師を目指しているが二十歳になるまで一度も海外に行ったことがなかった。自分の英語に自信をつけたい、海外でいろいろな経験を積んで将来に生かしたい、という思いから留学をしたいと思うようになった。また大学二年生の時にタイとカンボジアを旅行し、外国の文化や人々と触れ合うことの楽しさを知り、留学への思いを一層強くした。もともと英語は得意な方ではなかったが、自分は留学しなければならないという思いをモチベーションに TOEFL の勉強

をし、何度も受けて、留学をすることができた。

私はまず留学をしたいと思ったときに、留学生センターに相談に行った。それから留学が決まるまで、決まってから出発するまで、留学生センターの太田先生や留学生支援室の若井さんにはとてもお世話になった。留学への思いや留学先の相談など多くの時間を私のために割いてくださり本当に感謝している。

私にとってサンディエゴ州立大学での10ヶ月の留学生生活は本当にあつという間で、私の人生の中でも

かけがえのないものとなった。大学では自分の専門である英語教育に関する授業を受けることもできた。また専門とは直接関係ないが、興味があるコミュニケーションやライティングの授業も受けることができた。授業の中では週に一回、小学校を訪問し放課後生徒と遊ぶというプログラムもあり、とてもいい経験になったと思う。テスト期間では周りのアメリカ人に負けたくないという思いで、図書館に籠ってテスト対策をしたのもいい思い出である。また大学寮に住むことで他の国から来た交換留学生とも友達になることができ、たくさんの思い出を作ることができた。一番の思い出は、大学のジムが主催するスポーツリーグに友人と参加し、そこで優勝したことである。国籍に関係なくスポーツを通してコミュニケーションがとれるということも学ぶことができた。

アメリカにはハロウィン、サンクスギビング、クリスマス、ニューイヤーなど月に一度は大きなイベントがある。ハロウィンではコスチュームを買い、顔にペイントをし、サンクスギビングでは七面鳥を丸ごと焼いてターキーを自分たちで作った。クリスマスではほとんどの店がしまっしまい、日本のクリスマスとの違いを感じ、ニューイヤーでは周りの知らない人々と年が明けたことを祝った。これらのイベントを全力で楽しむことで、アメリカの文化を

学び、日本との違いも感じることができた。

長期休暇では、ロサンゼルス、ラスベガス、サンフランシスコなどの有名な都市を観光することができた。メキシコにも数回行くことができた。さまざまな町に行くことで思ったことは、それぞれの町にはそれぞれの町や人々の雰囲気があり、州が違えばその州のルールがある。アメリカという一つの国であっても地域によって全然違うものだと感じた。この違いは日本国内の地域差よりも大きいものを感じた。

私が留学から得たものは大学での授業で学んだこと、日本との文化の違いを肌で感じることができたこと、自分の英語に対する自信などたくさんある。その中でも一番重要なものは、さまざまな国籍の友人との出会い、彼らと共に生活をしたという経験である。アメリカ人だけではなく、ヨーロッパ、アジア、南米、アフリカ出身の人々と関わることで、世の中にはいろいろな人種がいて、世界の広さを感じることができた。また人種や国籍が違って自分と同じことで笑ったりすることができる。当たり前かもしれないが、留学しなければわからなかったことだと思う。この留学を通して得た友人との繋がりを失わずに、これからも国籍、言語等とは関係なく多くの人と繋がりを持っていきたいと思う。



学術交流協定の経緯（留学生センターがリエゾンの協定校）

ルンド大学との協定締結の経緯

留学生センター 准教授 土谷桃子

2011年6月現在、岐阜大学は、15ヶ国41大学と学術交流協定（全学）を結んでいる。ルンド大学との協定は、この中で8番目に古く、1987年9月に調印されている。同校との学術交流におけるリエゾン（連絡調整役）は、留学生センター長が務めており、ルンド大学が、岐阜大学にとって、そして留学生センターにとって重要な協定校であることは疑いない。同校との協定は、どのような経緯で結ばれることになったのだろうか。

1. 協定締結のきっかけ

協定締結に直接影響したと考えられるルンド大学との最初の接点は、現時点で筆者が確認している範囲では、1986年夏に工学部仁田昌二教授（当時）がルンドに立ち寄ったことである。

仁田教授は、ストックホルムで行なわれた学会に参加した後、当初はラップランドを訪問する予定にしていたが、同年4月のチェルノブイリ原発事故の影響が同地にも及んでいるという話を聞き、北部への訪問を断念した。そして、コペンハーゲンへの電車移動をする途中、どこかで1泊する必要性が生じ、名前だけは知っていたルンドに立ち寄ることにした。

仁田教授が食事をしようと市内のある飲食店に入ったところ、女性の店員、実はルンド大学で日本語を学ぶ学生に声を掛けられた。その学生は、日本の大学の留学から帰ったばかりであったが、留学先の大学が自分に合わなかったと話した。仁田教授は、それならば岐阜大学は安全で静かでいい大学だし、岐阜は物価も安いと話をし、日本語の先生にということでその学生に自分の名刺を渡した。

偶然が重なっていることに驚きを禁じえないが、仁田教授はこのときもう1軒の飲食店に立ち寄り、そこでまた別の日本語学習中のルンド大学生に話し

かけられたという。仁田教授がこのとき会ったルンド大学関係者は、この学生2名のみで、同大学の教職員には会っていない。翌1987年に協定が結ばれていることを考えると、仁田教授と2名のルンド大生の偶然の出会いが、両校の協定締結の直接的なきっかけになったと考えていだろう。

2. ルンド大学からの訪問

1987年1月21日付のルンド大学 Douglas Bratthall 教授、Kristina Lindell 講師の連名の手紙が早野三郎学長（第7代学長、学長在任期間1983年6月1日～1989年5月31日）に届いた。前年夏の仁田教授の名刺によってルンド大学の目が岐阜大学に向けられたのではないかと考えられる。その手紙の内容は、（1）将来両大学間の研究交流をしたい、（2）ルンド大学の東南アジア言語研究所が中級レベルの日本語を指導してくれる適当な大学を探しているの、H. Westling 副総長を団長とする訪問団を受け入れてほしいとの要請であった。

岐阜大学はその要請を了承し、1987年4月11日（土）～13日（月）の3日間、ルンド大学からの訪問団を迎えた。訪問団のメンバーは、H. Westling 副総長夫妻、D. Bratthall 教授（東南アジアプログラム主任）、K. Kockum 講師の4名であった。この訪問団は、既に交流提携していた創価大学、京都大学を訪問するのに合わせて岐阜大学にも立ち寄ることにしたという。

岐阜大学は、同訪問団を歓待した。11日（土）は、岐阜羽島駅に訪問団を迎えに行き、岐阜大学の学内を案内し、日本語学習プログラムを紹介した。12日（日）は根尾村の薄墨桜、谷汲山等へ訪問団一行を案内し、夕食には早野学長も合流した。そして13日（月）には、京都へ向かう訪問団を岐阜羽島駅まで見送った。

この行程中、岐阜大学側は教育学部藤掛庄市教授（当時、以下同）、医学部野澤義則教授、農学部鈴木正敏教授、そして前出の仁田教授等が接待に当たった。

ルンド大学の一行は、この3日間の岐阜滞在に満足し、岐阜大学に対して良い心証を持ったと類推される。訪問団の一員 Keiko Kockum 講師は、協定締結後に岐阜大学との交流（特に同校日本語科の学生の岐大への派遣）について、中心のかつ実質的な役割を果たすことになる。

3. 協定の調印まで

ルンド大学の訪問ののち、岐大では国際交流委員会で同校との協定が検討された。訪問の2ヵ月後の6月19日、同委員会はルンド大学との協定締結を了承した。

その1ヵ月後の7月16日、午前に臨時の部局長懇談会、午後に評議会が開催され、いずれの会議でもルンド大学との協定締結が議事となっている。以下議事録（メモ）を引用する。

【部局長懇談会】

議事（4）ルンド大学との学術交流について

学長から、62年6月19日の国際交流委員会で協定を締結することが了承された旨同委員長から報告を受けたとの説明があった後、午後の評議会で承認を得て調印の運びとしたいとの旨発言があった。

【評議会】

議事（4）岐阜大学とルンド大学との学術交流に関する協定書について

本議案について学長から資料3により諮り、審議の結果これを承認した。

評議会の「資料3」とは、協定書の原案で、“AGREEMENT FOR ESTABLISHING SCHOLARLY EXCHANGE AND CO-OPERATION BETWEEN GIFU UNIVERSITY (JAPAN), LUND UNIVERSITY (SWEDEN)”と題された書類である。同評議会の議事（5）は「学長の外国出張に伴う事務代理について」で、学長が、ルンド大学との協定締結等のため、9月11日から22日までスウェーデン、イスラエル、韓国へ出張すると発言している。

また、協定内容の細部の検討のために、同年7月16日から18日、藤掛教授がルンド大学を訪問し、訪

問団のメンバーであった Westling 副総長と D. Bratthall 教授と再会している。

1987年9月12日、早野三郎学長と野澤義則国際交流委員会委員長がルンド大学を訪問し、両校の学術交流協定書が調印された。岐阜大学は早野学長、ルンド大学は Westling 副総長がサインした。

このように両校は学術交流協定を締結し、その後更新を重ねつつ現在に至っている。

（本文章は、拙稿「大学間協定締結に至るまで—岐阜大学サマースクール（受入）の過去・現在・未来補遺—」（『岐阜大学留学生センター紀要2010』2010.3）を元に、その後得られた証言と資料を追加して著したものである。詳細については拙稿を参照願いたい。）

木浦大学との協定締結の経緯とその後

留学生センター 教授 森田 晃一

本学と韓国国立木浦大学との学術交流協定は、2008年2月26日に締結された。ここでは、締結にいたる過程と締結後の交流の実際について、簡単に記しておきたい。

木浦大学との学術交流協定のリエゾンである私は、木浦大学側の窓口である人文大学（学部）日語日文学科の朴賛基教授と、10数年前から個人的な研究交流を続けていた。学窓を共にしたとか、専門分野が同じであるとか、そのような関係はなかったが（専門は歴史と文学、ただし日本近世を研究対象にしていることは共通していた）、朴教授の恩師である小池正胤東京学芸大学名誉教授の紹介によって知り合ったのである（当時、私は小池氏と同じ研究会に所属していた）。

その後、朴教授が来日するたびに会って研究上の意見交換をしていたが、そのうち個人的な交流だけではなく、所属の両大学間で学術交流を行い、さらに広く深く、交流を活発化させて行ってはどうか、と話すようになって行った。木浦大学に行く必要性を感じた私は、2005年5月、韓国・釜山市で開催された国際学会の帰途、木浦市まで足を伸ばして初めての木浦大学訪問を果たした。総長への表敬訪問、関係教員らとの面会などをこなして行くうちに、協定の締結は両大学にとって意味あるものだと確信するようになり、協定締結に向けて本格的に動くこと、すなわち交流の実績を積み重ねることを決意したのである。そこで、2006年3月には木浦大学大学院での集中講義のために渡韓し、また、2008年3月には学術交流協定締結後の具体的な交流の打ち合わせのため3度目の訪問を行った。

協定の締結後は、学生交流・研究者交流とも順調に進展しているといえよう。

まず現在までに、学生交流の方は、岐阜大学から木浦大学へ、交換留学が1名、サマースクール参加が2名（ただし岐阜大学の前期開講期間が伸びたため、木浦大学サマースクールの期間と被ってしまい、岐大生の参加が難しい状況になっている）、木浦大学から岐阜大学へ、交換留学が4名、サマースクール参加が9名を数えている。

研究者交流の方は、上記の朴教授が、2009年2月から2010年1月までの1年間留学生センターで研修の機会を持った。現在はまた、朴教授に続いて日本の近代文学を専門とする許錫教授が、2010年8月から滞在し、センター教員との共同研究を行っている。一方、岐阜大学からは、2010年4月に地域科学部の林正子教授（副学長）が木浦大学主催のシンポジウムに講演者として招待され、また2010年12月には、留学生センターから小林浩二留学生センター長ほか3名が、木浦大学と岐阜大学による共同シンポジウム開催のために渡韓している。

このように木浦大学との学術交流は順調だが、一般に、慣習の異なる外国の大学との交流には予期しない問題も生じがちで、双方とも、その調整に多大のエネルギーを割かねばならないこともある。しかし考えてみれば、その問題の解決に向けて相互に努力する過程こそ「他者との交流」といえようし、学ぶべき点も多々あるのだろう。その認識を持って、学生交流・研究者交流とも全学的に幅を広げて、活発にして行ければと念願している。

留学生センターの事業紹介

日本語研修コース

留学生センター 准教授 橋本 慎吾

1. 概要

日本語研修コースは、留学生センターが開講する日本語コースの中で最も受講者数の多いコースである。集中コースと一般コースの2コースに分かれている。集中コースは短期間に日本語能力を向上させたいという留学生を対象としたコースで、A（未習）、B（初中級）、C（中級）、D（中上級）の4レベルを開講している。集中的に学習するため、週当たりのコマ数はAクラスで15コマ（ちなみに通常の全コマ数は週20コマである）と大変多くの時間を使って授業を行なっている。一般コースは、研究などであまり時間は取れないが日本語を学びたいという留学生を対象としたコースで、週1コマからクラスをアレンジすることができる。

2. 留学生センター設置以前

本学の留学生センターは、文部省の省令施設として、1996年5月に設置された。本センターの中心的な活動の一つは、文部省招致の国費研究留学生及び教員研修留学生に対する専門教育前日本語予備教育を実施することであった。それまで、本学の国費研究生に対する予備教育は、近隣の名古屋大学で行なわれており、教員研修留学生の予備教育は本学の全学補講で行なわれていた。全学補講とは本学の全留学生（大学院生、研究生、学部生、交換留学生など）を対象とする日本語教育であった。センター設置前は日本語教育を担当する専任教員がいなかったため、全学補講は非常勤講師によって実施されていた。学習者のニーズに合わせ、週当たりの時間数が

少ないクラスや、当時キャンパスが離れていた医学部の学生のためのクラスを開講するなど、状況に合わせた対応がなされていた。なお全学補講はセンター設置後もそのままの形で継続されたが、2005年に日本語研修コースの一般コースと名称変更し、現在に至っている。

3. 日本語研修コース開講

96年9月に予備教育担当の日本語専任教員2名が赴任し、10月に日本語研修コースという名称で予備教育が開始された。つまり「日本語研修コース」は、当初予備教育を行なう集中日本語コースとしてスタートしたのである。第1期は9名の配置があり、週18コマの授業を都合20週間行なった。予備教育は基本的に日本語未習者を対象とするが、第1期に受け入れた9名のうち1名の日本語レベルが中級であったため、第2期以降はこうした状況に対処できるよう、複数クラスに拡大・充実させた。複数クラスを設定したことに伴い、クラスごとの定員に余裕がもてるようになったため、予備教育対象者だけではなく、本学の留学生の中で、研究に必要な日本語能力養成が急務である留学生を、学内公募により受け入れることとなった。

2011年後期で、日本語研修コース（集中コース）は31期を迎えた。第1期は9名で始まった日本語予備教育であったが、現在は学内公募等により40名近い多くの留学生がこのコースで学んでいる。また集中・一般を合わせると50近いクラスを開講している。

日本語・日本文化研修コース

留学生センター 教授 森田 晃一

日本語・日本文化研修コースは、日本語・日本文化を専攻する学部生を対象とした1年間（10月～翌年9月）の研修コースで、10名を定員としている。

2001年10月に第1期生を受け入れ、2011年9月には第10期生を送り出したが、現在は第11期生を迎え入れているところである。その間の修了生は、第1期生8名、第2期生5名、第3期生6名、第4期生3名、第5期生6名、第6期生6名、第7期生5名、第8期生6名、第9期生7名、第10期生7名で、すでに59名を数えている。

当初は、大使館推薦と大学推薦（協定校対象）による国費受給の学生のみを受け入れていた。しかし、協定校から本コースへの留学希望が数多く寄せられるようになったため、現在は、受け入れ資格の幅を広げて、国費受給生のほか、各大学との交換員枠内において私費での留学を希望する者にも、選考の上許可を出すことにしている。

本コースの特色は、履修生用に独自の日本文化科目を設けていることにある。また、日本語科目に関しても、他のコースとの共通科目である「総合日本語」（レベル別クラス）を必修とするほか、学生のレベルに合わせた技能別科目（文章理解・文章表

現・口頭表現など）を必修とし、さらに全学共通教育開講の日本語科目も受講できるように工夫を凝らしている。

1年間のコースの前半（秋期）は、日本語運用能力の向上をめざして集中的に日本語を学び、後半（春期）は、さまざまな文化体験をしながら（能・狂言、和太鼓、大相撲、陶芸など）、秋期に習得した日本語運用能力を用いて論文作成を行う。この論文作成および担当教員による指導の丁寧さは、本コースのもう一つの特色ともなっている。

また毎年、論文の完成・提出後に1年間の総仕上げとして「留学生は“日本”をどう見たか」と題して、岐阜市立図書館との共催による研究発表会を開催している。昨年はNHKの取材が入り、発表会の様子が夕方のニュースに取り上げられた。また今年は、来会者が会場に溢れ、やむなく入場制限を行わざるを得ないほどの盛会であった。

このように、学内のみならず学外にも、岐阜大学日本語日本文化研修コースは知られてきているが、さらに内容を吟味して魅力あるコースを提供して行きたいと考えている。

日本語・日本文化研修コース授業科目コマ数（単位数）

授業科目	秋 期	春 期	合 計	備 考
総合日本語	5 (5)	—	5 (5)	
全学共通教育科目	—	2 (4)	2 (4)	
日本語読解演習	1 (2)	1 (2)	2 (4)	
日本語文章表現	1 (2)	1 (2)	2 (4)	
日本語発音・口頭表現	1 (2)	1 (2)	2 (4)	
日本語聴解演習	1 (2)	1 (2)	2 (4)	
現代日本の社会	1 (2)	—	1 (2)	
近代化と日本人	1 (2)	—	1 (2)	
クロスカルチャー・コミュニケーション	1 (2)	—	1 (2)	
日本の表象文化	—	1 (2)	1 (2)	
岐阜の地域文化	—	1 (2)	1 (2)	
論文指導	—	1 (1)	1 (1)	
修了論文	—	(4)	(4)	
合計	12 (19)	9 (21)	21 (40)	

留学生指導・相談

留学生センター 教授 太田孝子

留学生指導担当として本センターに着任したのは1996年9月16日という年度の半ばであり、以下の業務が中心であった。

- (1) 留学生の修学および生活に関する相談並びに指導・助言
- (2) オリエンテーションの企画及び運営
- (3) チューターに対する指導・助言
- (4) 日本人学生や地域住民との交流の推進
- (5) 海外留学を希望する日本人学生に対する指導・助言

以来15年、その都度、持ち込まれる相談に丁寧に対応し、状況を考えながら時に工夫・改善しつつ業務を遂行してきた。各業務の活動内容は以下のとおりである。

1. 相談業務

留学生・日本人学生等から持ち込まれる相談は留学生指導担当者である太田が全面的に担い、必要に応じて相談者の指導教員や関係部局、センター長、留学生課（2009年より留学生支援室）等にも助言や具体的協力を求めるという形で長年実施してきた。09年9月からは粥川美重子氏（同年3月まで、留学生課課長補佐）が技術補佐員として相談部門の補助もしてくれることになった。相談時間に関しては、留学生・日本人学生とも各自の都合で予約なしに来室することが多く、当初から相談者に合わせて相談を行うケースがほとんどである。

相談件数は少ない年でも年間500件、2人体制になってからは850件に及ぶ。相談内容は、学業関係、生活一般、経済問題、住居問題、健康問題、入管関係、市役所関係、トラブル、日本人学生からの留学・進路に関する相談、学内外からの相談と多岐にわたる。近年多い相談は、①交通事故の事後処理、②留年・研究室の変更など、③奨学金・授業料免除関係などであり、就任当初多かった入管および市役所関係（市営アパートへの入居や保育園入園手続きなどを含む）は減少している。渡日前に留学生に送付する連絡文書を改定し、来日時のオリエンテーションでの説明を充実させたことも、この項目の減少に寄

与しているといえる。

就任の数日前にセンターを訪ねた日から弁護士に会うような面倒な相談に携わったのを皮切りに、警察や病院への同行、多くの保険会社の担当者との面談等、指導教員には言えないような相談に多数関与してきた。中には解決に至らなかった問題もあったが、大事件に遭遇しなかったことは幸いだったと感じている。

2. オリエンテーションの企画・運営

留学生課（後、留学生支援室）と協力しながら、4月と10月に新規渡日者に対して生活を中心とするオリエンテーションを実施している。当初は日本語と英語のみで行なっていたが、中国人留学生の増加に伴い、8年ほど前から日本語・中国語のオリエンテーションも実施するようになった。中国語の通訳は、岐阜での生活が長い留学生に依頼している。就任直後に作成した『留学生のためのハンドブック』（現在は日・英、日・中）を毎年補足・改定し配布している。オリエンテーション当日は、学部事務の留学生担当者にも出席してもらい、オリエンテーション終了後には話し合いの場を設けて相互の連携に努めている。その他、毎学期、日本語研修コース、日本語・日本文化研修コース等各コースのオリエンテーション、国際交流会館到着時のオリエンテーションも実施している。

3. チューターに対する指導・助言

就任当初から、国際交流会館（以下、会館）には留学生の日常生活をサポートするために、3人の日本人チューターが入居しており、居住者から寄せられる様々な相談に乗ってきた。当初は私自身が会館の仕事に全面的に関わっていたのだが、新たに雇用された留学生課の会館担当者や若手の管理人が多く業務を担当してくれるようになった。チューターの人数も、その後4～5人に変更、日本人学生だけでなく留学生も応募できるよう改善し、現在は日本人2人、留学生2人が務めている。学期始めに会議をして業務内容等の確認を行う他、問題や協議事項

があればその都度会議を開いて対応している。時には館長や主事に出席してもらうこともあるが、多くは会館担当者・管理人と相談しながら対応している。チューターが定期的に行なうミーティングの報告書により、会館内の状況も把握しやすくなった。

これまで何度か大きな問題が起こったため、部外者の個室への入室は禁止、面談時間や場所も限定するなど会館の規則はかなり厳しい内容になっている。規則を巡っての問題提起、提案などが起こることもあるため、入居者からの要望を聞く機会を設けたり、チューターが中心となって毎月様々なイベントを開催して親睦を図っている。

4. 日本人学生や地域住民との交流の推進

就任当初は日本人学生と出会う機会がなかったため、「留学生と日本人学生の交流サロン」を週一度開催していたのだが、全共の授業やサークル（留学ラブの顧問）、留学から帰国した日本人学生などを通し人脈が広がったため、次第に学内での交流がスムーズに行なわれるようになった。

他方、近隣のボランティアグループ「国際交流の輪の黒野」は、4月の花見、12月の餅つきなど留学生のためのイベントの他、引越しの手伝いなど多くの支援や交流をしてくださっている。また、大学祭期間中には美濃の「せびあ会」によって着物の着付けを通した交流も行なわれている。男性や子ども用の着物も用意されているので、多くの留学生とその家族が日本の着物文化を楽しむ日として定着している。「国際ソロプチミスト岐阜」による、鶺鴒への招待も留学生には好評である。

日韓理工系学部留学生事業

1. 概要

日韓理工系学部留学生事業(以下日韓プログラム)は、1998年10月8日の日韓共同声明「21世紀にむけた新たな日韓パートナーシップ」に基づき、韓国の高校を卒業したばかりの学生をわが国の理工系、特に工学部で学部生として受け入れるというプログラムである。このプログラムには1年間の予備教育期間が設定されており、前半の半年を韓国で、後半の

5. 海外留学を希望する日本人学生に対する指導・助言

留学生からの相談に次いで多くの時間を費やしているのが、留学を希望する日本人学生への対応である。TOEFLの壁もあって交流協定校への留学者数はほとんど増加していないが、相談者はかなり増えている。英語圏ではオーストラリアのシドニー工科大学、アメリカのウエストヴェージニア大学を希望する学生が多い。そしてここ3年ほど韓国への留学希望者が続出するようになり、現時点で4人が留学中である。2009年からソウル産業大学（現ソウル科学技術大学）でサマースクールが実施されるようになり、その参加者の中から私費留学生も含め、既に8人が留学している。また、ドイツへの留学生も増加し、今年は3人が留学している。英語圏以外の留学にはTOEFLスコアの提出を廃止し、現地語に関する証明書（授業の履修も含む）の提出を課したことも留学生の増加につながっているといえる。奨学金は、JASSO（日本学生支援機構）の枠が毎年ほぼ一人にまで減少しているが、岐阜大学奨学金は3人(月5万円)を確保、また、留学中3月～9月、または10月～3月いずれか半年を超えれば、授業料半減という制度も導入し、わずかながら便宜を図っている。自国の日本人学生の育成のために、さらなる奨学金の増加が望まれる。サマースクール(派遣)の項でも記したが、学生時代に異文化に接し、自文化や自分自身を見つめ直すことは意義深く、一人でも多くの学生が海外留学を経験してほしいと願っている。

留学生センター 准教授 橋本 慎吾

半年を日本で教育を行なうこととなっている。2000年度に第1期がスタートし、現在第13期を迎えている。

本学の日韓プログラム

本学は第1期の2000年度から本事業に参加を表明し、第1期は5名の学生が本学に配置された。当時の報告（『岐阜大学留学生センター紀要2001』年報

編第3章)によると、配置の問題で学生の来日が遅れ、当初は10月に開講予定だったが11月6日からの開講となったということである。5名とも韓国での予備教育で初級レベルの日本語能力を持っており、半年間の日本での予備教育によって、日本語能力試験1級合格レベルまで向上した学生が3名いた。

第1期の日韓プログラムは、日韓学生だけのクラスを設定することができた。日韓プログラムでは、通常の日本語能力だけではなく、日本の学部の講義を理解するための専門日本語の能力も必要であるため、数学、化学、物理、生物の4教科に関する語彙や表現などの教育も行なった。また、日本と韓国の学習要領に多少の相違があるため、日本の工学部で学ぶために必要な知識(要するに日本の学生が大学入学に必要な専門知識)を習得する「専門クラス」を設け、本学の工学部博士課程の学生に講師を依頼し、高校教科書などを用いた授業を行なった。

2. 第2期以降

2001年度の第2期は、第1期の問題点への対処が求められた。この事業は前期の予備教育修了後の配置試験の成績によって日本での配置大学が決まるため、第2期の学生たちは前期の予備教育期間中は専門科目の勉強にばかり力を入れ、その分日本語がおろそかになり、結果第1期生より日本語力が低いという情報が事前に入ってきていた。

日本社会文化プログラム

日韓第2期は5名の配置があった(いずれも男性)が、彼らは第1期生と違い、来日当初は全く日本語を話さなかった。開講前に、本学補講コースで実施しているプレースメントテストを受けてもらったところ、レベル的には初級修了といった感じであった。学生たちは半年後には学部に入學し、専門科目の講義を日本語で受講していかなければならないわけで、これはかなり厳しいものであると判断された。そこで第2期からは基礎的な日本語能力の向上を目指し、センターが開講している日本語研修コースでの教育を行なうことにした。また、日韓第1期生は2001年4月に無事本学工学部に入學したが、入學後の追跡調査を行なったところ、「人文系科目の語彙の不足」についての意見が出された。学部では文系科目を履修しなければならないが、内容がわからず困ったとの意見だった。そこで第2期からは、第1期に行なった科学分野の専門授業に加え、新たに文系の専門科目を設けることにした。

このように、学生達の進學状況を踏まえながら、プログラムの充実を図っている。

第2期は5名、第3期3名、第4期3名と比較的多くの学生が本学に配置されてきたが、第5期以降は配置がなく、現在に至っている。今後も進學先である工学部と協力して、情報発信をして行く必要がある。

留学生センター 准教授 橋本慎吾

1. 概要

留学生センター発足当時は200名程度であった留学生数も、10年後には約2倍の400名近い留学生が本学に在籍するようになった。そんな中、留学生センターが担うべき役割も拡大し、様々なコース・プログラムを開講し、留学生及び学内のニーズに対応している。

留学生数の増加は、本学の学術交流協定の拡大とも大きく関係している。2011年6月の時点で15カ国41大学と交流協定を結んでおり、その協定に従って交換留学生(特別聴講学生)の受入・派遣が行なわれている。これまでも多くの交換留学生が本学で学

んできているが、交換受入の課題の一つに、交換留学生の志望理由と受入部局とのズレの解消があった。志望理由の一つに「日本語・日本文化を学びたい」というものがある。日本文化についてはその内容(歴史、文学といった具体的な内容)によって学部の教員が指導教員となることは可能であるが、日本語を学びたいという希望に対し、適切な受入先となる学部は本学には存在しない。そのため、「日本語・日本文化」を志望理由とする学生は、この内容に関連がある研究をしている学部の教員が指導教員となっていたが、関連があるといっても年間を通して希望に合った十分な教育機会を提供するのは難し

く、結果、日本語を学びたいという希望がある学生は、留学生センターの日本語コースを受講するケースが多かった。

こうしたズレを解消し、学生の志望理由と教育内容を一致させるための一策として、留学生センターが交換留学生の受入部局となり、交換留学生に対する教育・研究の場の提供を行なうことが必要であると考え、センターで検討が重ねられた。

また、大学における国際化促進の重要性が取りざたされるようになり、本学でも様々な取組が行われている。留学生センターでもこの問題について検討してきたが、国際化の中でも、学内における国際化、日本語コミュニケーションによる国際化の促進が留学生センターの役割ではないかという認識に達した。具体的には、留学生に対する日本語教育にとどまらず、岐阜大学に在籍する日本人学生に対する国際理解教育をも視野に入れた、総合的な教育・研究活動の実践のことである。

そこで留学生センターでは、2007年度に国際交流推進の基盤となる教育を行なう新しいプログラムを設置した。それが日本社会文化プログラムである。このプログラムでは、留学生が、日本の文化や言語の理解を深め、自国との相違点を把握しながら日本での学究に有用な見識を深めることを目的とするとともに、岐阜大学に在籍する日本人学生と留学生との交流の場を提供し、両者が国際的な視野を拡げることを目的としている。

2. 2段階の教育内容

このコースにおける留学生センターが想定する教育内容は2段階に分かれる。それらは、「異文化理解」を進める段階と、「日本文化理解」を進める段階である。

まず「異文化理解」では、様々な国、民族、立場の人々と交流する中で国際的な視野を養い、自己を

向上させるための基礎的な知識を身につけ、種々の活動を通じ、相互理解を深めるための基盤を作ることを目的とする。この相互理解には、当然日本人も含まれる。本学の日本人学生にとっては将来国内外で活躍するために必要な国際的な意識を高める機会となる。

「日本文化理解」は、「異文化理解」で培われた知識を更に高め、日本の伝統文化や社会や言語を通時的に、また共時的に学ぶことを目的とする。既存の知識や語学力を駆使し、自分自身の考えや意見を的確に表現し、議論を重ねることのできる能力を有する国際的な人材を養成する。また、日本人学生は、自身の文化や言語を見直し、また留学生と学び合うことによって、自国の文化に対する新たな視座を獲得できる。

またこのプログラムの特色のひとつとして、日本文化の真髄に触れる機会を提供しているという点がある。茶道江戸千家副家元である川上紹雪氏に茶道に関する講義をお願いし、茶道に関する講義と共に、実際に茶道を体験する機会を提供している。このような機会は日本人でも得がたいものであり、留学生にとってはまたとない機会となっている。なおこの授業の様子はCSにて放送された（シアターテレビジョン『江戸千家～家元の所作に学ぶ～』『岐阜大学特別講義・実習』其の一・其の二・其の三）。

3. 第1期から第9期まで

2007年度に開講した日本社会文化プログラムは、2011年後期で第9期となる。これまで、タイ、アメリカ、オーストラリア、中国の学生が本プログラムを受講し、日本語及び日本文化を学んできた。プログラム終了時に日本語での小論文（2000字程度）の提出を課しているが、興味の対象は様々で、短いながらもしっかりとした内容の論文に仕上がっている。将来的にはwebでの公開を考えている。

全学共通教育

留学生センター 教授 森田 晃一

1996年5月に文部省の省令施設として設置された留学生センターは、教官定員5名で発足した。そのうち、日本語・日本事情教育担当教官2名は教養部からの移籍、予備教育担当教官2名と修学・生活指導担当教官1名は新任であった。そのため、留学生センターは、教養部のある時代から、日本語・日本事情を担当するため（センター発足当初は前・後期に日本語6科目・日本事情4科目、現在は留学生教育の実情に合わせて日本語3科目・日本事情5科目）教養教育に出動してきた。

その後、教養部を引き継いだ教養教育推進センターへの、留学生センターから出動する教員数と科目数は年々増加し、現在、下表に見るように留学生センターの教員5名全員が、日本語・日本事情科目に加えて、人文科学系個別科目を担当するようになっている。

下表のうち、クロス・カルチャー・コミュニケーション

ションと日本事情C IおよびC IIの3科目は、日本人学生にも開放し、それぞれ多文化間関係論と異文化論IおよびIIとして、合同クラスを編成する異文化論の科目となっている。また、日本語口頭表現IとIIおよび日本語学入門の3科目は、留学生センターの開講科目を全学共通教育に提供するという形で実施しているものである。なお、2012年度は日本語学入門の、前期をI、後期をIIとしてさらに1コマ増やす予定にしている。

このように、留学生センターの教員数と全学共通教育の担当科目数から見たとき、各学部所属の教員の出動よりも、留学生センター教員の貢献度は高いものといえるだろう（もちろん教育的効果を勘案し適切だと判断できる科目に限定していることはいうまでもないが）。今後は、担当数の増加はこれ以上難しいため、既存科目の内容の充実に力を注いで行きたいと考えている。

留学生センター教員による全学共通教育開講科目

教員名	科目数	科 目 名
太田孝子	1	クロス・カルチャー・コミュニケーション
森田晃一	6	日本事情A I・日本事情A II・日本事情C I・日本事情C II 日本史II・日本史III
橋本慎吾	2	日本語口頭表現I・日本語口頭表現II
土谷桃子	4	日本語D I・日本語D II・日本語D III・国文学III
吉成祐子	1	日本語学入門

サマースクール（受入）

留学生センター 准教授 土谷 桃子

岐阜大学サマースクールプログラム（受入、以下略）は、2011年度に24回目の開校を迎えた。1988年度の第1回実施から、一度も途切れることなく毎年度開催され、約四半世紀の歴史を有している。ここ

ではこのプログラムの歴史と、現在のプログラムの内容と特徴を述べる。

1. 歴史

サマースクールの主たる参加者を派遣しているのは、学術交流協定校の一つ、スウェーデンのルンド大学である。ルンド大学との協定締結は、1987年9月であり、翌1988年度からサマースクールが始まっていることを考えると、協定締結時に既にサマースクールが念頭に置かれていたものと思われる。

開始当初のサマースクールは、1984年度に学内に設けられた国際交流室が運営を担った。国際交流室は、固定的な予算もなく、室員のボランティア精神に支えられた組織だったようである。1988年度の第1回プログラムは、ルンド大学からの参加者7名、現在同様6月から7月の8週間という長期にわたるものであった。期間中、参加者はホームステイをし、日本語授業は国際交流室が担当した。

1991年度、ホームステイから岐阜大学の施設である学外合宿研修施設（以下略称、学外研）がサマースクールの宿舎として使用されるようになり、ホームステイは期間を限ったものに縮小された。学外研には1993年度までは常駐の管理人がいたが、1994年度に通いの管理人に変更された。管理人不在の夜間・休日のサマースクール参加者の安全確保のため、岐阜大学の日本人学生をチューターとして宿舎に宿泊してもらう制度（宿舎チューター制度）を開始した。この制度は現在も続いている。

1995年度からソウル産業大学（現ソウル科学技術大学）からも参加者が送られてくるようになった。ルンド大に対しては8週間のコースを提供しているが、ソウル産大には学年歴の関係で全期間の参加が不可能なため、後半3週間（2007年度から後半4週間）のコースを提供している。

1996年度、文部省（当時）の省令施設として留学生センターが発足した。これに伴いサマースクールは留学生センター事業となり（～2005年度）、日本語授業も留学生センターが担当することになった。同年から、郡上市でのホームステイプログラムが郡上八幡国際友好協会の全面的な協力を得て開始される。先に述べた宿舎チューター制度とこの郡上ホームステイプログラムは、本サマースクールの参加者が、毎年賛辞を惜しまない素晴らしい特色となっている。

2006年度、サマースクールは、留学生センターの事業から、全学の委員会である留学生交流委員会が掌握する全学行事となった。理由はいくつかあったと思われるが、最大の理由は、本プログラムがもはや

学内の一部局である留学生センターだけでは担いきれない規模と重要性を持つようになったからである。

例えば、サマースクール参加者が期間中滞在する学外研は、大学キャンパスから約8キロの距離がある。2007年度まで通学手段はほぼ自転車に限られていた。6、7月という梅雨の時期に、自転車で通学することをやむなく大学も認めていたのだが、軽重さまざまな交通事故が発生していたため、2008年度からスクールバスを運行するようになった。また、学外研には個室に空調設備がなく、学生は扇風機で暑さを凌ぐしかなかったのだが、2009年度に全室にエアコンが設置された。学内施設について言えば、2010年度まではサマースクール用の日本語授業教室がなく、毎年度教室探しに奔走していたが、2011年度からは専用教室が措置された。このような対応は、学内の小さな一部局である留学生センターだけではできない。全学事業であるからこそこのような改善は可能であった。

2008年度からは、留学生センターが中心となって学術交流協定を結んだ木浦大学（韓国）からも4週間コースに参加者が送られるようになった。

2011年度現在、サマースクールは国際戦略本部（2009年5月発足）の留学生受入・地域貢献部会が掌握するという位置づけになっている（留学生交流委員会は2010年度末で廃止）。サマースクール（受入）については、同部会が留学生センターに委嘱しており、従来どおり実際の運営は留学生センターが担当している。

2. 現在のプログラムの内容と特徴

現在のサマースクールは、学外研の部屋数の関係で上限25名の定員で開催している。参加者はルンド大学、ソウル科学技術大学、木浦大学等の学術交流協定校から迎えている。

サマースクールの日本語授業は、月～木の午前中に行なわれる。留学生センター専任教員がコーディネーターを務め、専任教員・非常勤講師によるチームティーチング授業である。日本語授業のない時間に数回の日本事情講義がある。また、学外に体験に出掛けるエクスカージョンも提供している。

質の高い日本語授業を提供することはもちろんだが、講義やエクスカージョンについては、以下の2点に重点を置いている。

まず、「地域密着志向」である。岐阜大学ならではの、岐阜という地域の強みを生かした内容を提供

するよう心がけている。郡上ホームステイプログラムはその最たるものだが、他にも土岐での陶芸体験、美濃での浴衣の着付けと和太鼓体験、高山や白川郷への旅行などがある。

もう1点は「本物に触れる」ということである。本物のプロの役者をお呼びしたワークショップを、2005年度から能、2007年度からは能に加えて狂言、と現在二つ提供している。このような「本物に触れる」体験は、日本人学生にとっても有益であろうと考え、2011年度には能については、サマースクールの枠を飛び越え、岐阜大学活性化経費（教育）の助成を受けて全学の留学生・日本人学生が参加できる大規模なワークショップとした。サマースクールが自身の枠を打ち破る可能性すら秘めていることを示した事例である。

サマースクール（派遣）

留学生センター発足以来、留学生指導部門担当者としてサマースクール（派遣）に携わってきたが、15周年を機にこれまでの歩みを記しておきたい。

岐阜大学における日本人学生を対象としたサマースクール（夏期短期留学）の開始は、1986年のアラスカ大学フェアバンクス校への21名の派遣にまで遡る。そして、このサマースクール（派遣）が実施されるまでには、アラスカ大学から担当教授が来日して打ち合わせを重ねるなど3年程の歳月を要していることが、当時の国際交流委員会の議事録等に残されている。しかし、このように多くの尽力によって始まったアラスカ大学への派遣は3回実施されただけで（1986年～87年、及び89年）、その後同校との交流協定は延長されず終結となった。

以後、スウェーデンのルンド大学（1988年～2000年まで断続的に8回参加）、中国の浙江大学（1990年～97年及び2000年～2002年まで毎年参加）、アメリカのノーザンケンタッキー大学（1992年～97年まで毎年参加）、サンディエゴ州立大学（2001年のみ参加）、ユタ大学（2002年のみ参加）等の各校で、毎年日本人学生に対するサマースクールが実施されてきた。この間のサマースクール参加者は241人である。最多はノーザンケンタッキー大学への24人で

このサマースクールは、歴史的に見ても内容的に見ても、岐阜大学の誇るべきプログラムであると自負している。しかし、近年では、新型インフルエンザの流行（2009年度）、福島第一原発事故（2011年度）のように、いかんともしがたい問題によって開催が危ぶまれる事態にも遭遇した。今後も数々の困難に見舞われるであろうが、その時はサマースクールの歴史とそれを支えてきた先達の熱意と苦労を思い、適正に対応していきたいと思っている。

（本文章は、拙稿「岐阜大学サマースクール（受入）の過去・現在・未来—2008年度の試みと今後の課題—」（『岐阜大学留学生センター紀要 2008』2009.3）を元に、2008年度以後の変更事項を追加して著したものである。詳細については拙稿を参照願いたい。）

留学生センター 教授 太田孝子

あり（1992年）、反対に、浙江大学（1990年）とルンド大学（1998年）には1人で参加した学生もいる。

上述のように、私の就任時にはサマースクール（派遣）は10年の歴史を有しており、派遣に関する事務も「国際交流室」の担当者と生協が協力し合いながら、既に多くのノウハウを蓄積していたのである。派遣に携わる者としては、説明会の内容の改変、帰国後の反省会・報告会の開催、報告書の刊行など、従来の方法に少しずつ改善を加え、新たな企画を盛り込んでいったに過ぎない。

就任後の大きな変化は、2002年からオーストラリアのグリフィス大学へのサマースクールが始まったことである。当時は、中国やアメリカでのサマースクールにも同時に参加していたのだが、2002年11月に中国でSARSが発生したことをきっかけに浙江大学のサマースクールへの参加を中止、その後は参加希望者が皆無となり同校への派遣は消滅していった。また、アメリカへの留学は短期間でもビザの取得が義務付けられたため、募集開始からビザを取得して出発するまでに要する時間が壁となり、参加が困難となった。さらには経済不況等の影響により参加者も減少したため、英語圏でのサマースクールはオーストラリアのグリフィス大学（5週間コース）

に一本化され、現在に至っている。一方、2008年からは韓国のソウル産業大学(現ソウル科学技術大学)で、2009年からは木浦大学でサマースクールが開始した。指定の枠があるため、多数の応募者の中から厳選して派遣している。

サマースクール(派遣)の流れは、以下のとおりである。3月上旬までには関係者(事務担当者、生協、派遣担当教員)が話し合って実施校を決定、それぞれの分担等を確認し合い、実施校との連絡を開始。同月下旬にはチラシやポスターを作製、新学期には各学部掲示板・生協等にポスターを貼り、新入生にチラシを配布。各学部事務にもチラシを置いてもらい、プラズマディスプレイも用いて周知を図る。次いで4月中旬に2度「サマースクール説明会」を開催し、参加者の募集を開始。説明会では、担当教員、事務担当者、生協担当者による説明等の他、前年度の参加学生数名による体験談の発表や質疑応答、交流会を行なっている。先輩の体験談を聞いて参加を決める学生も多く、発表者にとっては、再度サマースクールを振り返ることにもなり、双方にとって有意義な時間となっている。5月中旬の参加申し込み直後から、語学研修に関する諸準備が始まる。語学研修(現在は英語とハンゲル)は、サマースクール開催校からの留学生を中心に講師を委嘱し、週2回(1回2時間)8週間程度実施している。授業内容に関しては講師と何度も話し合って準備をするのだが、その年によって参加人数や充実度に差があるのが実状である。出発前には事務及び生協からの諸連絡、担当教員による「異文化理解講義」、前年度参加学生との交流などを中心とする「事前研修」を行なって出発に備えている。8月に現地へ出発、帰国後は10月中旬に『サマースクール報告書』の原稿締め切り、11月下旬に刊行し関係者・関係部署に配布している。就任後から帰国後の反省会を始めたのだが、そこで話される一人一人の「生の声」を、何らかの形で残しておかなければと考え、2001年のサンディエゴ州立大学でのサマースクール終了後に『夏期短期留学体験記』を刊行したのを契機に、翌年からは本学で実施しているサマースクール(受入)の『報告書』に派遣も加わり、合同で刊行するようになった。就任前のサマースクール(派遣)の記録は、参加者が帰国後に提出したアンケートと「News Letter」に載っている数人の文章だけだったので、活字で記録を残しておく必要性を感じたためである。毎年、報告書にはサマースクールでの日々

が、生き生きと記されている。

さらに、2007年からは「私達の留学の“真実”」と称する留学報告会を始めた。毎年、サマースクールだけでなく協定校へ留学した学生、協定校からの留学生による体験談や大学紹介を基に、熱心な質疑応答、交流が行なわれている。また、学生には「留学の長所・短所、費用、語学レベル、出発までの流れ、留学先でのある一日、生活・活動環境、コメントなど」を書いてもらい、小冊子にして留学希望者に配布している。

上述してきたように、サマースクール(派遣)の開始から今年で26年目を迎える。ここ数年、英語の必要性が高まっていることもあってか、グリフィス大学への参加者は増加傾向にある。昨年の17人に続き、現在は16人の参加者が語学研修を受けながら出発に備えている。ソウル科学技術大学への希望者は13人だったが、志望動機等により6人を厳選、残念ながら参加できない学生にも呼びかけて、現在語学研修を実施中である。

サマースクール(派遣)の意義は、日本人学生が実際にその国に赴き、そこで語学研修や生活を通して、異文化交流・異文化体験をすることにある。楽しい体験ばかりではなく、実際には苦い体験の方が多いのだが、何よりもコミュニケーションの難しさや外国の人々から受ける親切や温かいもてなしなどから学ぶことが多いようだ。伝えたいことすら満足に伝えられない語学力、そのような厳しい現実に萎縮してしまう自分自身と正面から向き合い煩悶を重ねていく過程、自国の社会や文化・歴史を見直し、相手国に対する関心を深めていく過程は、何物にも代えがたい貴重な体験である。このような体験が、その後の各自の学生生活に目的と意義を与え、次のステップへの原動力となっていることを、これまでも幾度となく目にしてきた。サマースクール参加者の中には、その後協定校へ一年間留学する学生、何度も海外へ出かける学生、留学生との交流に熱心な学生、留学生のチューターをしてくれる学生、など積極的な学生が多い。数週間のサマースクールが各自に広い視野を与え、大きな影響を及ぼしていることが分かる。

今後も、日本人学生が外国の人々や文化に接し、また自分自身と向き合うことによって、各自の求めるものと出会うことができるようなサマースクール(派遣)を、関係者と協力しながら提供していきたいと考えている。

資 料

留学生センター及び国際交流関係組織の沿革

留学生センター設置以前（1996年5月10日以前）

1981年（昭和56）	5月	岐阜大学国際交流委員会の発足
1984年（昭和59）	9月	岐阜大学国際交流室の開設（岐阜大学本部棟1階）
1985年（昭和60）	7月	第1回国際理解教育の集い開講
1986年（昭和61）	3月	国際交流会館 A 棟竣工
	7月	岐阜大学国際交流室広報誌 NEWS LETTER No.1 創刊
1988年（昭和63）	6月	第1回岐阜大学サマースクール開講（ルンド大学生7名参加）
1995年（平成7）	4月	岐阜大学国際交流室は、「岐阜大学国際交流センター」と改称し、旧岐阜大学工業短期大学部ホール（学生合宿所）に移転
		国際交流センター長・同主事を設置
		学生部学生課に国際交流事務室（室長、留学生係・国際交流係）を整備
		国際交流センター内に国際交流事務室を配置
	8月	国際交流会館 B 棟竣工
	9月	国際交流会館 B 棟竣工記念式典及び祝賀会開催

留学生センター設置以降（1996年5月11日以降）

1996年（平成8）	5月11日	文部省省令施設として「岐阜大学留学生センター」設置
		学生部（現：学務部）に留学生課（課長、留学生係、専門職員）設置 （国際交流事務室国際交流係は、庶務部庶務課研究協力室所属となる）
		留学生センター運営委員会及び留学生センター交流推進委員会発足
		留学生センター開所式・祝賀会開催
	10月	国費外国人留学生の日本語予備教育開始（留学生9人）
2000年（平成12）	4月	岐阜大学国際交流関係委員会（国際交流委員会、学術交流専門委員会及び留学生交流専門委員会）の改組により、新規に「岐阜大学国際交流委員会」が設置され、その下部組織として留学生交流に関する専門的事項を審議する「留学生交流専門委員会」（委員長：留学生センター長）が発足
	10月	岐阜大学留学生センター日本語・日本文化研修コースの開設
	11月	日韓共同理工系学部留学生の日本語予備教育開始

2001年（平成13）	10月	岐阜大学留学生センター日本語・日本文化研修コース第1期生 国費留学生8人（大使館推薦4人，大学推薦4人）受入
2004年（平成16）	4月	国立大学法人岐阜大学設立
		岐阜大学サマースクールプログラム（受入）が Lund 大学（スウェーデン）の学士プログラムに認定
2006年（平成18）	3月	岐阜大学留学生センター交流推進委員会の廃止
		岐阜大学国際交流委員会を改組，留学生交流専門委員会の廃止
	4月	岐阜大学国際交流委員会（委員長：研究・学術情報担当理事）の設置
		岐阜大学留学生交流委員会（委員長：教学・学務担当理事）の設置
2007年（平成19）	4月	岐阜大学留学生センター日本社会文化プログラムの開設 （留学生センター所属の特別聴講学生の受入れ開始）
		岐阜大学留学生センター教授会の発足
2008年（平成20）	2月26日	木浦大学（韓国）と学術交流協定締結（申請部局：留学生センター）
2009年（平成21）	4月	学務部留学生課を廃止し，学術情報部国際企画課留学生支援室を設置
	5月	岐阜大学国際戦略本部の設置 本部長として，副学長（国際交流担当）就任
		岐阜大学国際交流委員会の廃止
2010年（平成22）	3月	国際交流会館C棟（ゲストハウス）竣工
	4月	国際戦略本部長として，副学長（国際戦略担当）就任 学術情報部の名称変更により，留学生支援室は学術国際部国際企画課留学生支援室に改称
		4月26日（月）国際交流会館C棟開館記念式典及び見学会
2011年（平成23）	3月	岐阜大学留学生交流委員会の廃止
	10月	全国留学生センター長及び留学生担当課長等合同会議開催

歴代岐阜大学留学生センター長

所属部局	職名	氏名	任期	備考
留学生センター	教授	中須賀 徳行	H 8 (1996). 5. 11～H10 (1998). 3. 31	(注1)
留学生センター	教授	中須賀 徳行	H10 (1998). 4. 1～H12 (2000). 3. 31	再任
農学部	教授	堀内 孝次	H12 (2000). 4. 1～H13 (2002). 3. 31	
農学部	教授	堀内 孝次	H14 (2002). 4. 1～H16 (2004). 3. 31	再任
地域科学部	教授	ラッセル・G・ゴードン	H16 (2004). 4. 1～H18 (2006). 3. 31	
応用生物科学部	教授	武脇 義	H18 (2006). 4. 1～H20. (2008). 3. 31	(注2)
教育学部	教授	小林 浩二	H20 (2008). 4. 1～H22. (2010). 3. 31	
教育学部	教授	小林 浩二	H22 (2010). 4. 1～H24. (2012). 3. 31	再任

(注1) 当該年度国庫予算成立遅延のためセンター設置が遅れ、平成8年5月11日付け発足となった。

(注2) 平成16年4月1日：農学部が改組され応用生物科学部となった。

参考 留学生センター設置以前の国際交流組織（学内措置）

歴代岐阜大学国際交流室室長

所属部局	職名	氏名	任期	備考
教育学部	教授	藤掛 庄市	S59 (1984). 9. 1～S63 (1988). 3. 31	
工学部	教授	藤井 洋	S63 (1988). 4. 1～H 4 (1992). 3. 31	
農学部	教授	堀内 孝次	H 4 (1992). 4. 1～H 7 (1995). 3. 31	

岐阜大学国際交流センター

所属部局	職名	氏名	役職名	任期
教育学部	教授	小澤 克彦	センター長	H 7 (1995). 4. 1～H 8 (1996). 3. 31
農学部	教授	堀内 孝次	センター主事	H 7 (1995). 4. 1～H 8 (1996). 3. 31
教養部	教授	中須賀 徳行	センター長(注3)	H 8 (1996). 4. 1～H 8 (1996). 5. 10

(注3) 当該年度国庫予算成立遅延のため、留学生センター設置（平成8年5月11日）までの暫定措置。

* 岐阜大学国際交流センター：平成7年4月岐阜大学国際交流室を改組（学内措置）。

留学生センターの広報活動

1. 広報誌の発行

誌名	発行年	備考
留学生センター年報	1997年（平成9年） 第1（創刊）号発行	1999年第3号まで発刊 以後は、紀要と併載して発行
留学生センター紀要	1998年（平成10年）創刊	以後毎年発行
岐阜大学夏期短期留学 サマースクール報告書	1994年（平成7年）創刊	以後毎年発行 2002年度から受入・派遣を併載
留学生センター日本語・日本文化研修留 学生修了論文集	2002年 第1集発行	以後毎年発行 第9集まで発行
留学生センター・フォーラム 地域における日本語教育 ―岐阜地域の 多文化共生を考える― 報告書	2003年5月発行	単発
留学生センターニューズレター	2003年9月創刊	2007年3月第8号発行，以降休止
異文化理解プロジェクト報告書	2003年11月発行	単発
日本語研修コースAクラスプロジェク ト報告書 2002秋期～2003春期	2003年11月発行	単発
留学生センター自己評価報告書	2003年12月発行	単発
多文化共生社会のための日本語コミュニ ケーション ―平成17年度岐阜大学活性 化経費事業（教育）報告書―	2005年3月発行	単発
留学生センター・フォーラム 岐阜地域の国際化戦略 ―大学と自治体の連携の可能性―報告書	2009年3月発行	単発

2. 特別講演会（会場はいずれも留学生センター研修室）の開催

回数	開催年月日	時間	講師及び講演題目
第1回 (平成8年度)	1996年12月11日	15:00~17:00	国立国語研究所日本語教育教材開発室 中道 真木男室長 「日本語教育における教材開発について」 参加者14名
第2回 (平成9年度)	1997年11月26日	15:00~17:00	名古屋大学留学生センター 尾崎 明人教授 「接触場面の会話と日本語の習得」
第3回 (平成10年度)	1998年12月16日	15:00~17:00	大阪大学文学部 土岐 哲教授 「日本語のイントネーション・リズムの教育」
第4回 (平成11年度)	1999年6月4日	15:00~17:00	アデレード大学日本研究学学科長 Purnendra Jain (プルネンドラ・ジェイン) 教授 「オーストラリアの大学における日本研究・教育の 動向および個人研究 (日本の市民運動)」
第5回 (平成12年度)	2000年12月18日	15:00~17:00	京都教育大学 森本 順子教授 「日本語教育を考える: 『日本語文型辞典』の文型 と位相」
第6回 (平成13年度)	2001年6月29日	13:00~15:00	鳥取市歴史博物館名誉館長 池田 百合子氏 (元 早稲田大学国際部教授) 「仏教美術: 東西の交流」
第7回 (平成14年度)	2002年7月31日	15:00~17:00	駿河台大学現代文化学部 櫻坂 英子助教授 「日本人の国民性は集団主義か?」
第8回 (平成15年度)	2003年12月15日	15:00~17:00	新潟大学留学生センター 足立 祐子助教授 「多文化共生社会のためのコミュニケーション」
第9回 (平成23年度)	2011年11月16日	16:00~17:30	木浦大学校日語日文学科 許 錫教授 「韓国大学の国際交流に対する一つのモデル —国立木浦大学校における個人的な体験を中心 として—」

3. フォーラム等の開催

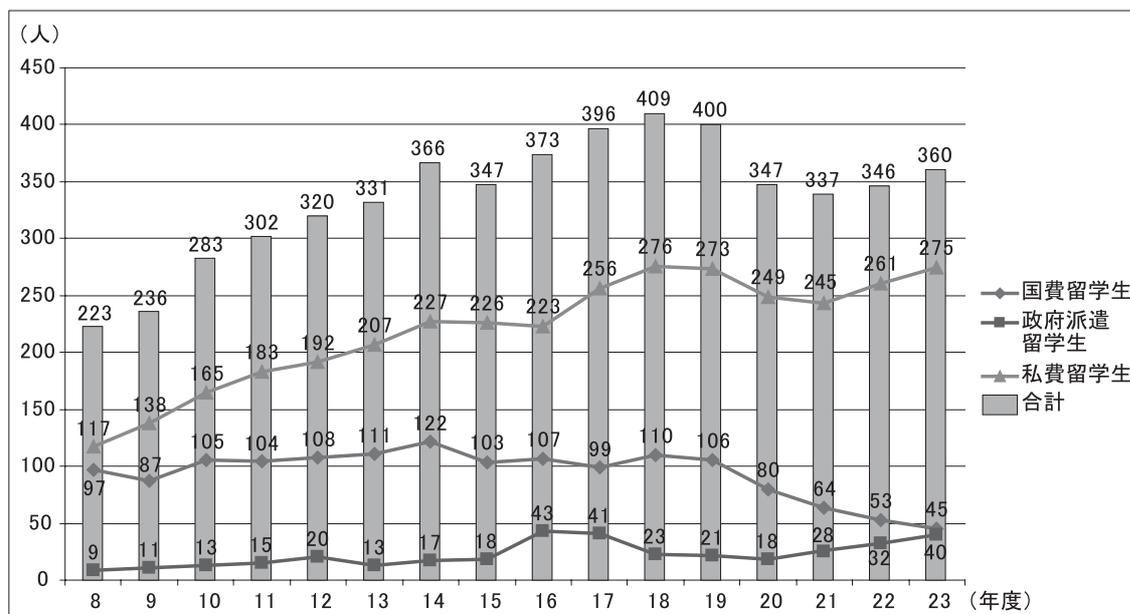
種 別	開 催 概 要
フォーラム 1	<p>開催日：2003（平成14）年 3 月 8 日 会 場：岐阜グランパレホテル（5階）カトレアの間 テーマ：地域における日本語教育 ―岐阜地域の多文化共生を考える― 基調講演：山形大学教育学研究科教授 高木 裕子氏 「山形県における日本語教育と多文化共生」 岐阜大学留学生センター長 教授 中須賀 徳行氏 「岐阜県における日本語教育の概要」</p> <p>パネルディスカッション パネラー 大垣市西小学校教諭 馬淵 直子氏 小牧市味岡中学校非常勤講師 舟橋 月江氏 可児市国際交流協会 清水 恵美氏 東海日本語ネットワーク 米勢 治子氏</p> <p>※このフォーラムは、中須賀前センター長退官記念講演を兼ねて開催</p>
公開セミナー 1	<p>開催日：2007年 3 月10日（土）13：00～16：00 会 場：岐阜市立図書館・本館 1階ホール 講 演：「明治開国期の英語ブーム」 岐阜大学留学生センター准教授 土谷 桃子 「江戸ブームと現代」 岐阜大学留学生センター教授 森田 晃一</p>
公開セミナー 2	<p>開催日：2008（平成20）年 3 月15日（土） 会 場：てつめいギャラリー（岐阜市） 岐阜市立図書館共催 歴史を複眼で見る ―朝鮮の高等女学校の思い出― 講演 1：岐阜大学留学生センター教授 太田 孝子 「女学校卒業生との交流を通して」 講演 2：古典文学研究家 吉田 重氏 「歴史の裏を見る」</p>
フォーラム 2	<p>開催日：2009（平成21）年 2 月27日（金）14：00～16：30 会 場：医学部記念会館 2階ホール</p> <p>「岐阜地域の国際化戦略―大学と自治体の連携の可能性―」 （岐阜地域との連携 岐阜大学活性化経費助成事業）</p> <p>大 学 岐阜市立女子短期大学国際文化学科准教授 須永 敬 「岐阜から世界へ―岐阜市立女子短期大学の国際交流活動―」 岐阜経済大学経営学部准教授 加藤 由紀子 「岐阜経済大学に入学する留学生数の推移とそれに伴う変化」 岐阜大学留学生センター教授 森田 晃一 「留学生教育と地域 ―岐阜大学サマースクールの試み―」</p> <p>自治体 岐阜県総合企画部国際課 新田 豊氏 「地域と大学との連携を目指して」 岐阜市市民参画部国際課 山本 哲也氏 「岐阜市の国際交流と多文化共生」 各務原市産業部観光交流課 奥村 和彦氏 「各務原国際協会のこれまでの取り組みと今後の課題」</p>

<p>フォーラム 3</p>	<p>岐阜大学サマースクール関連企画：協定校との更なる連携を目指して ～ルンド大学・木浦大学の先生をお迎えして～ 開催日：2009（平成21）年7月17日（金）14：30～16：30 会 場：岐阜大学全学共通教育棟 2C 教室 共 催：岐阜大学留学生交流委員会 講演者：岐阜大学元学長 加藤 晃先生 ルンド大学人文学部言語文学センター日本語常勤講師 鈴木ルンドストロム和代先生（スウェーデン） 木浦大学日語日文学科長 朴 賛基先生（韓国）</p>
<p>外国人研究者による講演会</p>	<p>開催日：2010（平成22）年1月27日（水）15：00～17：00 会 場：全学共通教育棟（4階）第3セミナー室 共 催：岐阜大学国際戦略本部 テーマ：「江戸時代の異文化交流と日本文学―日韓関係史を中心に―」 講 師：韓国国立木浦大学校 朴 賛基教授</p>
<p>木浦大学との合同シンポジウム</p>	<p>開催日：2010（平成22）年12月5日（金） 会 場：木浦大学（韓国） 講演者及び講演タイトル 小林浩二センター長 「東ヨーロッパにおける農村の変化と課題 ―ブルガリアの農村を中心に―」 森田晃一教授 「近世都市・江戸と茶の湯」 吉成祐子准教授 「言語使用における文化的背景との関わり」</p>
<p>能楽ワークショップ</p>	<p>「留学生と日本人学生のための能楽ワークショップ～見て、聞いて、体験して～」 岐阜大学平成23年度活性化経費（教育）採択プログラム 開催日：2011（平成23）年6月15日（水）13：30～15：30 会 場：医学部記念会館多目的会議室 講 師：観世流シテ方 味方團先生，田茂井廣道先生</p>

留学生数の推移

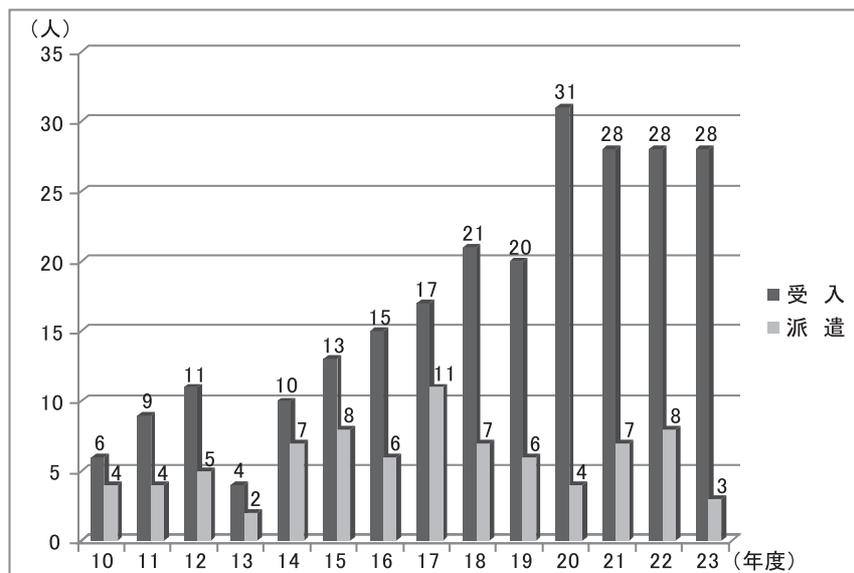
1. 岐阜大学外国人留学生受入れ状況（留学生センター発足後各年5月1日現在）

(単位：人)



2. 短期交換留学生数（受入・派遣）

(単位：人)



* 平成23年10月現在の受入留学生数 227名

* 平成23年10月現在の派遣留学生数 82名

2-1. 短期交換留学大学別留学生数（受入）

（単位：人）

国名	大学名	年 度													計	
		10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22		23
中国	吉林大学							2	1	2		3	1	1	2	12
	電子科技大学								1	2	2	2	2	2	2	13
	広西大学									2	2	2	2	2	2	12
	内蒙古農業大学											2			1	3
	華僑大学												2	3	2	7
	内蒙古大学												1	1		2
	同済大学												1	1	2	4
	江南大学													2		2
大韓民国	ソウル科学技術大学	1	1	2	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	35
	木浦大学												2		2	4
	高麗大学														1	1
ベトナム	ハノイ工科大学		1													1
オーストラリア	グリフィス大学	2	2	1	1	2	1	1	1		3	6	1			21
	シドニー工科大学					2	3	2	2	2	2	2	2	2	3	22
ハンガリー	ヴェスプレーム大学							1								1
スウェーデン	ルンド大学	1	2	2	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	23
英国	アバティダンディ大学							2	2	2		2				8
ドイツ	エアフルト大学									1						1
アメリカ	サンディエゴ州立大学		1	2			1	1	2		1	2	3		1	14
	ノーザンケンタッキー大学		1	1			2		1					2	1	8
	ユタ大学	2	1			1					1					5
	ユタ州立大学			3		1							1	1		6
	ウエストバージニア大学										1			2	2	5
ブラジル	カンピーナス大学					1	1	1		1					4	
タイ	コンケン大学※						1									1
	チェンマイ大学							1	1	1	1	1	2	1	1	9
	カセサート大学									1		1		1		3
	モンクット王トンプリ工科大学									1	1		3	2		7
バングラディッシュ	ダッカ大学								1	1	1	3			1	7
計		6	9	11	4	10	13	15	17	21	20	31	28	28	28	241

※は部局間協定

2-2. 短期交換留学大学別留学生数（派遣）

（単位：人）

国名	大学名	年 度													計	
		10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22		23
大韓民国	ソウル科学技術大学				1	1	1		1	1			1	2		8
	木浦大学												1			1
	高麗大学													2		2
オーストラリア	グリフィス大学	2	1	1		2	2	3								11
	シドニー工科大学					1		1	3	1	3	1	1			11
ドイツ	エアフルト大学							2						2	1	5
スウェーデン	ルンド大学	1					1			1			1			4
アメリカ	サンディエゴ州立大学	1	1						1	1				1		5
	ノーザンケンタッキー大学				1		1		1	2	2	1	1	1		10
	ユタ大学		1	2		1	1									5
	ユタ州立大学		1	2			1		2							6
	ウエストバージニア大学								1		1	2	2		2	8
中華人民共和国	浙江大学					1										1
	同済大学									1						1
イギリス	アバティダンディ大学					1										1
ブラジル	カンピーナス大学						1		1							2
タイ	チュラロンコン大学								1							1
計		4	4	5	2	7	8	6	11	7	6	4	7	8	3	82

（平成23年10月現在）



3. 留学生センター所属留学生数

3-1. 日本語・日本文化研修留学生受入状況

(単位：人)

区分	期別 (年)	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	第7期	第8期	第9期	第10期	第11期
		国費 (大使館推薦)	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
国費 (大学推薦)	4		1		3							1
私費 (JASSO 奨学生)	4	5	5	1	2	2	1	2	2	1	1	1
私費												
合計	8	5	6	3	6	6	5	6	7	7	7	8

3-2. 日本社会文化プログラム受入状況

(単位：人)

期別 区分	19年度		20年度		21年度		22年度		23年度	
	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	第7期	第8期	第9期	第10期
受入数	3 (1)	2	3	3	4	6 (1)	4	1	3 (1)	2

() は、半年間で修了した留学生数で内数

4. サマースクール参加学生数 (受入・派遣)

4-1. サマースクール大学別受入状況 (平成8年～平成23年)

(単位：人)

国名	大学名	年 度															
		8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
大韓民国	ソウル科学技術大学	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	6	5	2	3	
	木浦大学													3	3	3	3
スウェーデン	ルンド大学	7	12	9	12	9	10	6	13	18	23	13	15	15	17	17	17
アメリカ	ノーザンケンタッキー大学	1		2	1												
	ユタ州立大学													1			
イギリス	アバディンデン大学								1								
	計	13	17	16	18	14	15	11	19	23	28	18	21	24	22	23	20

4-2. サマースクール大学別派遣状況 (平成8年～平成23年)

(単位：人)

国名	大学名	年 度																
		8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	計
中華人民共和国	浙江大学	2	4			4	2	5										11
大韓民国	ソウル科学技術大学													10	7	5	6	28
	木浦大学														2			2
スウェーデン	ルンド大学	9		1	8	6												15
アメリカ	サンディエゴ州立大学						13											13
	ノーザンケンタッキー大学	5	7															
ユタ大学	ユタ大学							5										5
	ポートルランド州立大学											14						14
オーストラリア	グリフィス大学							11	7	16	11	10	15	11	8	17	16	122
	計	16	11	1	8	10	15	21	7	16	11	24	15	21	17	22	22	188

学術交流協定校一覧

大学間協定（15カ国41大学）

（平成23年10月現在）

協定大学名	都市名	国名	締結日	授業料 免除	交換可能 学生数※
カンピーナス大学	サンパウロ州 カンピーナス	ブラジル連邦共和国	1984. 8. 27	有	2
サンディエゴ州立大学	カリフォルニア州 サンディエゴ	アメリカ合衆国	1985. 5. 7	有	4
浙江大学	浙江省杭州市	中華人民共和国	1986. 4. 21	有	3
広西大学	広西省南寧市	中華人民共和国	1986. 4. 24	有	4
電子科技大学	四川省成都市	中華人民共和国	1986. 7. 21	有	2
江南大学	江蘇省無錫市	中華人民共和国	1986. 9. 3	有	3
中国医科大学	遼寧省瀋陽市	中華人民共和国	1987. 8. 15	無	—
ルンド大学	ルンド	スウェーデン王国	1987. 9. 12	有	2
ノーザンケンタッキー大学	ケンタッキー州 ハイランドハイツ	アメリカ合衆国	1990. 9. 26	有	2
ソウル科学技術大学	ソウル	大韓民国	1992. 3. 19	有	3
グリフィス大学	クィーンズランド州 シドニー	オーストラリア	1995. 3. 3	有	4
ユタ大学	ユタ州 ソルトレイクシティ	アメリカ合衆国	1997. 5. 28	有	2
ユタ州立大学	ユタ州ローガン	アメリカ合衆国	1997. 5. 29	有	2
ハノイ工科大学	ハノイ	ベトナム社会主義 共和国	1998. 6. 26	有	2
ウェストバージニア大学	ウェストバージニア州 モーガンタウン	アメリカ合衆国	1998. 12. 16	有	3
カセサート大学	バンコク	タイ王国	1999. 8. 5	有	—
内モンゴル農業大学	内モンゴル自治区 フフ・ホト市	中華人民共和国	2000. 8. 8	有	2
シドニー工科大学	ニューサウス ウェールズ州 シドニー	オーストラリア	2000. 8. 14	有	3

パンノン大学	ヴェスプレーム	ハンガリー共和国	2001. 3. 2	有	3
アンダラス大学	西スマトラ州 パダン	インドネシア共和国	2001. 4. 23	有	4
バングラデシュ農業大学	マイメンシン	バングラデシュ 人民共和国	2001. 8. 23	無	—
エアフルト大学	エアフルト	ドイツ連邦共和国	2002. 12. 4	有	3
吉林大学	吉林省長春市	中華人民共和国	2003. 5. 20	有	4
チェンマイ大学	チェンマイ	タイ王国	2003. 8. 4	有	3
ダッカ大学	ダッカ	バングラデシュ 人民共和国	2004. 6. 17	有	3
モンクット王 トンブリ工科大学	バンコク	タイ王国	2005. 1. 10	有	3
華僑大学	福建省泉州市	中華人民共和国	2005. 3. 29	有	3
同済大学	上海市	中華人民共和国	2006. 3. 16	有	2
ランボン大学	ランボン州 バンドル・ランボン	インドネシア共和国	2006. 4. 25	有	2
ポートランド州立大学	オレゴン州 ポートランド市	アメリカ合衆国	2006. 6. 19	無	—
内蒙古大学	内モンゴル自治区 フフ・ホト市	中華人民共和国	2007. 2. 6	有	2
木浦大学	全南務安郡	大韓民国	2008. 2. 26	有	3
シバジ大学	マハラシュトラ州 コラプール	インド	2008. 3. 18	有	2
バイロイト大学	バイロイト	ドイツ連邦共和国	2008. 8. 22	有	4
西南交通大学	四川省成都市	中華人民共和国	2008. 9. 5	有	4
ベンハー大学	ベンハー	エジプト	2009. 3. 18	有	2
高麗大学	ソウル	大韓民国	2010. 1. 15	有	4
カウナス工科大学	カウナス	リトアニア	2010. 3. 8	有	4
コロラド州立大学	コロラド州 フォートコリンズ	アメリカ合衆国	2010. 8. 13	無	—
ボゴール農業大学	ボゴール	インドネシア共和国	2010. 12. 2	有	3
内蒙古師範大学	内モンゴル自治区 フフ・ホト市	中華人民共和国	2011. 6. 8	無	—

※毎年、1学年度の間に派遣または受入可能な最大限の人数を表しています。

岐阜大学留学生センター憲章

岐阜大学留学生センターは、地域社会・国際社会からの信頼と期待に応えるため、外国人留学生及び本学学生の教育研究活動を支援する組織である。本センターでは、外国人留学生に対する日本語・日本事情教育及び日本人学生のための国際理解教育に重点を置き、次に掲げる施策を遂行することにより、次世代の国際社会を担う優れた人材を育成し、本学の国際化を積極的に推進し国際社会に貢献する。

1. 諸外国から来る外国人留学生に対する日本語・日本文化事情教育を推進し、国際社会に貢献する。
2. 外国人留学生が抱える生活上の諸問題に対する相談と適格な生活指導。
3. 学術交流協定校等との連携・交流を推進し、異文化理解教育を積極的に推進する。
4. 本センターがもつ特性を積極的に活用し、国際社会に貢献する人材を育成する。
5. 独創的な国際教育の創設や指導方法の確立。
6. 諸外国との学生交流を積極的に行い、大学の国際化を推進する。
7. 本センターの諸成果を地域社会に還元するとともに国内外に広く情報を発信する。

教育基本戦略

1. 日本語・日本事情教育指導の充実

- a. 外国人留学生のレベル・ニーズに対応したプログラムの作成。
- b. 日本語研修コース、日本語・日本文化研修、日本社会文化プログラム等多彩なプログラムの開設と教育方法の充実。
- c. 海外の大学・学術交流協定校との連携および留学生教育を通して、国際社会に貢献する。

2. 国際理解教育の充実

- a. 異文化を理解するための機会提供と教育指導をさらに深め、国際的な視野と見識をそなえた学生を育成する。
- b. 日本人学生の海外留学への機会拡大のため、サマースクール・短期交換留学等のプログラムの充実を図る。
- c. 海外留学推進のため必要な調査・アンケートを実施し、その結果を検証し多様なプログラムを立案する。
- d. 外国人留学生と日本人学生間の交流の場を広げ、相互理解の推進を図る。

3. 外国人留学生に対する適切な生活支援の実施

- a. 外国人留学生が抱える生活上の様々な悩み・問題等に対し適切な生活指導を行い、円滑な留学生活が送れるよう支援する。
- b. 快適な留学生活ができるよう支援組織の充実と拡充を図る。

地域貢献基本戦略

- a. 増加する企業、地域等の外国人及びその家族に対する日本語教育方法の相談及び指導者の教育等に積極的に応じる。
- b. 各種セミナー、シンポジウム、講演会等を開催し、本センターの成果・情報を広く地域社会に発信する。

運営基本戦略

- a. 留学生の教育と生活を充実させるために適正かつ迅速な交流ができる運営を目指す。
- b. 必要に応じて本学の教養教育に参加する。

岐阜大学留学生センタースタッフ一覧

留学生センター長	小林 浩 二
留学生センター教授	太 田 孝 子
留学生センター教授	森 田 晃 一
留学生センター准教授	橋 本 慎 吾
留学生センター准教授	土 谷 桃 子
留学生センター准教授	吉 成 祐 子
留学生センター技術補佐員	粥 川 美重子
留学生センター事務補佐員	森 瀬 真 理

岐阜大学留学生センター設置15周年記念事業実行委員会委員

留学生センター長	小林 浩 二
留学生センター教授	太 田 孝 子
留学生センター准教授	土 谷 桃 子
留学生センター准教授	吉 成 祐 子
留学生センター技術補佐員	粥 川 美重子

岐阜大学留学生センター設置15周年記念誌

2011年11月発行

岐阜市柳戸1番1

編集兼
発行者 岐阜大学留学生センター

責任者 小林 浩二

印刷所 西濃印刷株式会社

岐阜市七軒町15番地



GIFU UNIVERSITY INTERNATIONAL STUDENT CENTER

